

337
361



0050942-000

特200-699

高女物語

寺尾幸夫・著

文明社

昭和6

AHM

100

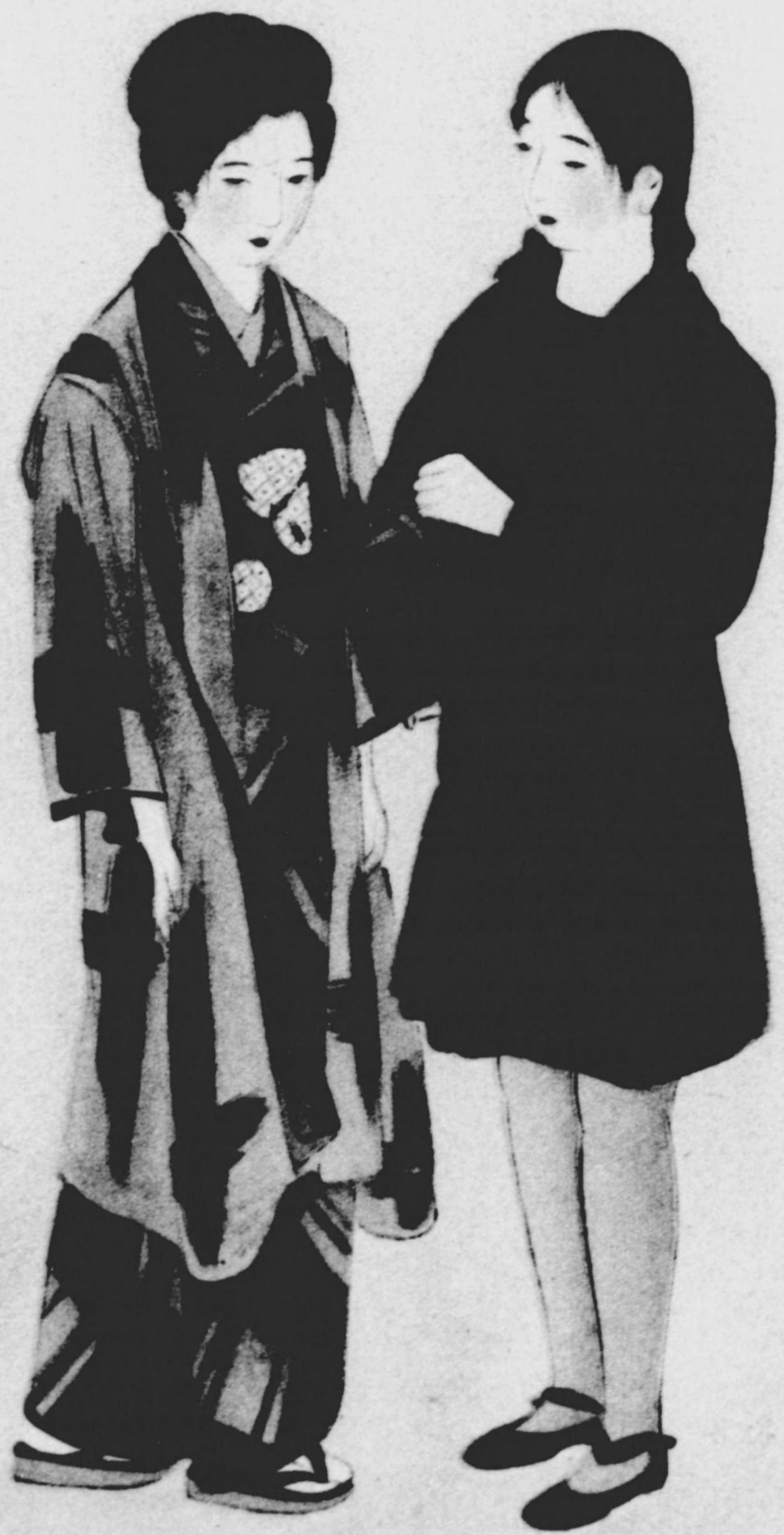
特 200
699

言 女 物 諸
方 尾 子 夫 燕



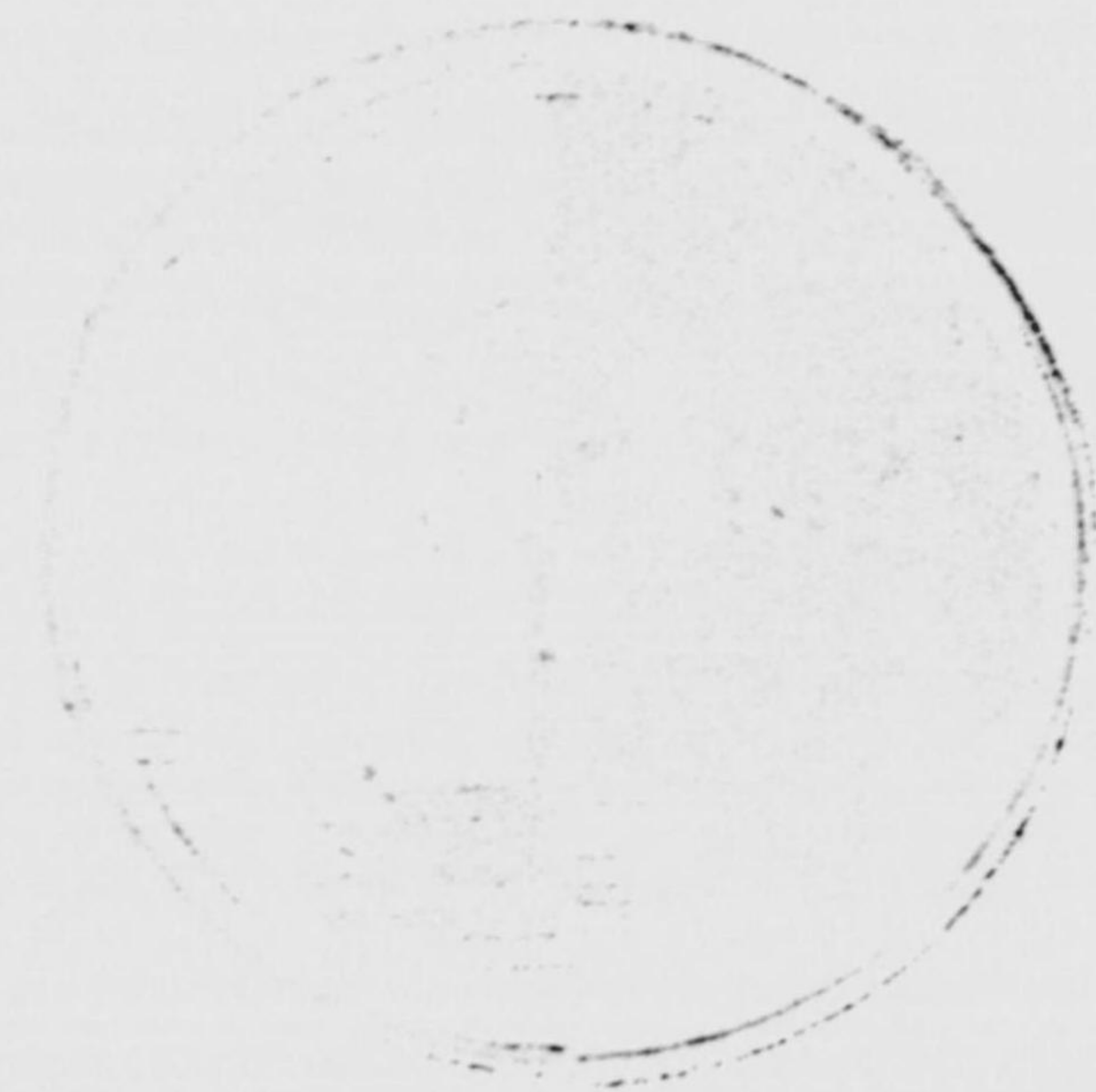
文 明 社





二五二
二五二

二五二
二五二
二五二
二五二
二五二



この書は私の可愛い姪たち

大野吉子	大野春子
星野春江	大野祐子
一圓喜代子	和智章子
和智聰子	和智千加子
井上よし子	

にやるのです

著者

序

日本の少女には如何にユーモアの少いことよ！

私は長い間、少女の雑誌を編輯してゐながらこの感を深くしてゐました。さうして長いあいだ、ユーモアの供給者を探しました。無理な揶り笑ひや、低能なゲラ／＼笑ひやは随分供給されましたが、私は、そのたんびに、いつも失望ばかりしてゐました。

然るに私は、こゝに偶然にも、私の求めて止まなかつた殆んど天才的なユーモリスト寺尾幸夫氏を發見しました。私は先づその筆致の非凡に驚きました。そして、こみ上げる喜びを禁じ得ませんでした。

私は、私の編輯してゐた雑誌「少女の友」に殆んど二ケ年に渡つて毎月、寺尾氏の作品を發表して、愛読者と共に楽しみました。毎月のことでありながら、決して倦むことを知らず、益々その筆力の冴へに驚き、描寫の眞實味に眼を見張るばかりでありました。

寺尾氏のユトモアには深味があり實在性があります。而してユトモアの中にもペーソスがあります。ペーソスの中にもユトモアがあります。これらの點に於て私は寺尾氏のユトモアを天下獨歩であると推奨しても敢て誇張ではあるまいと信じてゐる次第であります。

昭和六年五月

岩 下 小 葉

はしがき

私には幾人もの姪がゐます。みんな高女生活をしてゐますが、その姪たちや其のお友達達の云ふこと成すことを見聞きしてゐますと、ほんとうに可愛くなるのです。

純真な朗かさの中に、少女でなければ感じ得られぬセンチメント。茶目る間にも、清く正しく美しきものに憧れを持つてゐる彼女たちであります。

で、私は彼女たちの後の日の爲めにストーリー・ライターとなつて、いまの彼女たちの話を其のまま書き綴つて置いてやらうと思つたのが、この著になつたのであります。

それは、いつまでも彼女たちが、いまのままの心像を持ちつとけてゐてほしいと思ふ私の意からであります。

幾人かの少女の話を、一人の主人公によつて表現したのは、雑誌『少女の友』に連載する都合からで、この物語の主人公は幾人もの姪たちや、そのお友達ともだちの集合身しゅうごうしんであることを豫めお断りして置きます。

昭和六年五月の或る日

世田谷池尻の寓居にて

著者

高女物語 目次

お裁縫とクララボー……………	一
同情心の行方……………	二六
映畫事件……………	五三
桃割れ事件……………	七三
父の心、母の心……………	九六
何故悪い……………	一三三
不裁縫同盟……………	一四三

キユービー會……………一七二

彼女の秘密……………一九四

「前に述べた」さん……………二三一

センチ……………二四五

今やう四人お染……………二六六

窓の聲……………二八八

てるてる坊主……………三三三

級長選舉……………三三九

お縫裁とクララボ

合はない襷下

「厭だわ、お母さん、襷下が合やしないぢやないの——」

私が一生懸命縫った銘仙の袴の、襷下の裏表の寸法が怎うしても合はないので

す。

「そりや縫ひやうが悪いから、緩んだんでせう、布地が——」

と、お母さんは直ぐに私の縫ひやうが悪いと仰有るのです。

「あら、私、前学期だつてお裁縫は甲よ」

「甲でも何でも、縫ひやうが悪いから合はないんだわ、裏地が緊れたんでせう——お見せなさい」

と、お母さんは、私からお仕事を受取りました。そして尺指を當て、
「表はちやんと一尺八寸になつてゐるわ、裏が緊れたんだわね」と、お母さん
は仰有る。

「あら、そんな事はないわ、私がちやんと裏も六十八センチに取つてあるんで
すもの——」

と、私が云ひますと、お母さんは

「あら、私は一尺八寸のつもりで斷つたのよ、此の着物——」と、お母さんは
決してセンチとは云はないのです。

「だつて私は六十八センチのつもりよ」と、私が云ひますと、お母さんは

「六十八センチか何か知らないけど、貴女の着物は襟下を一尺八寸にすれば好
いのよ」

と、お母さんは壓制です。

「でも、學校では六十八センチだつたわ——」

と、云ひながら裏をセンチ尺で計り直して見るとちやんと六十八センチある
のです。

「厭だわ、お母さん、一尺八寸に斷つて終ふんですもの——」

と、私が文句を云ひますと、お母さんも決して負けてはゐません。

「一尺八寸なら好いちやありませんか」

「宜かないわ、二ミリも裏が詰まつて終つてふきが出やしないわ」

と、私は又縫ひ直さなければならぬと思ふと、とても憤慨なんです。

「だから、私はセンチだのミリは嫌ひなのよ」と、お母さんは笑つてます。

「そりやお母さんが舊弊だからだわ」

「舊弊でも何でもお母さんは、一尺八寸なの——それで悪ければ、お母さんに着物を断たせたり、寸法を聞いたりしないが好いわ」

「もう、聞かないわ、懲り〜」

「え、え、聞かれないで幸、お縫裁は學校でお習ひなさい。そのセンチだのミリだのね——ほ、ほ、」

と、お裁縫の事では、毎時も、お母さんと論判しなければならぬのです。

お母さんは、いま私が行つてゐる高女の卒業生なんですけれど、何故斯う舊弊なんだか解りません。

「日本の着物にセンチだのミリだのつて、ほんとにお可怪いわ」と、いつも仰有るんです。そして決してセンチ尺を使はないんです。ですからお母さんにお裁縫の事を聞くと、毎時でも紙と鉛筆を持つて行つて、尺をセンチメートルに

直さなくてはならないんです。

「袖口は五寸五分」と教はつて、其の通りに縫つて學校へ持つて行つたら、矢張り二ミリも違ふと云ふので乙にされたんですもの、その時もお母さんが悪いんだつて論判しまつたのです。

トテモ憤慨なんです

全くお母さんは舊弊で困るんです。

「お母さんだつて、女學生の時があつたんだわね」

「そりやあつたわ」

「メートルは教はらなかつたの？」

「メートル位教はつたわ、三尺三寸。一センチは三分三厘ぐらゐの事は知つて

ゐるわ——」

「そんなら何故お裁縫に使はないの？」

「お母さんの頃はまだお裁縫は尺で、メートルは算術で教はつただけですもの」
「でも、吉添さんの小母さんは、赤ちやんのあるお母さんですけど、お裁縫はメートルだわ」

「そりや彼の方はメートル奥さんですもの」

「あら、メートル奥さんて何？」

「ほ、ほ、ほ、メートルになつてからの奥さんよ、だから今年卅歳ぐらゐでせう
その時分の方は尺とメートルと両方で教はつたから宜いけど、お母さんにはメ
ートルは、脳に入つてゐないから見積りが思ふやうに出来ないのよ」
「だから、怎うしても舊弊なのね」

「え、爾うよ、皆、若い人より年を取つた人の方が舊弊なの、それが當然でせ
う」

「ですから私固つちまうわ、お母さんは、私たちに理解がないんですもの……」

「ほ、ほ、お母さんが貴女なんか理解があつたら大變だわ、邦樂座にドロン
ス何とかの映畫が来たから行きませうの、神宮外苑に野球があるから行きませ
うなんて、其の度にお附合してゐたら、それこそ家が持てないわ」

「まア厭なお母さん、野球を見たつて、そんな悪いことはないわよ」

「徳にはならないでせう」

「徳になるわ、面白いぢやありませんか」

「鳥渡も面白かないわ、蒲鉾屋の摺古木のやうな棒を振り廻したつて、何の變
哲もないわ」

「あゝ、舊弊々々、お母さん、「度し難き」つて云ふ事を知つて、」
「知つてますよ、貴女のやうなのが、お跳ねの度し難き者つて云ふんでせう、
ほゝゝ」

「まア酷い、お母さんの舊弊も度し難きね」

「ほゝゝ、お母さんは未だ貴女なぞに度されてゐる程毫録しないつもりよ」

斯うして、その日もお裁縫の事から、お母さんと親舊思想の衝突で論判しち
まつたんです。

それでも私は仕方がないから、其の儘縫つて、その裕を學校へ持つて行つて
出したのです。するととても厭しいお裁縫の山上先生は、センチ尺で縫つて

「平澤さん、貴女は、此の裕はお母様に断つて頂いたでせう」と、直ぐ仰有い
ました。私は見附かつた以上は止むを得ませんから、

「えゝ」と云つたのです。

「それぢや貴女のお稽古にならないから、全部センチ尺で縫ひ直してゐらつし
やい來週の月曜日までにですよッ」と云はれたのです。

おやゝこれ、今度の日曜に松竹館ヘクラ、ボートの「街の女王」が見に行
けなくなつて終つたと思ふと憤慨で憤慨で堪りません。

假約束のお約束

けふは金曜日、學校から歸ると家政の宿題もしなければならぬし、英語書
取の暗記もしなければならぬのに、明日はまた國文の先生が作文の宿題を出
すに決つて居ますから、愈上日曜はお裁縫の縫直して一日丸潰れとなる。あゝ
悲觀悲觀。

私は泣き度いやうな気持ちで、金曜土曜——どうやら宿題だけは済ましたその土曜の晩です。明日の日曜に一緒に松竹館へ行く假約束してあつた江藤さんから電話でした。

「明日のクラ、ポー間違ひないでせうね」

と、云ふのです。

「あら、私行かれないのよ」

「あら、怎うして？」

と、云ふので、私はお裁縫の縫ひ直しのことを話したのです。

「困つたわね」

「困つたつて、ですから假約束よつて云つて置いたぢやないの——」

「そりや爾うですけど、私すつかり當にしてゐたんですもの——」

と、江藤さんも情ない聲を出してゐます。事實、私たちは、何時でもお友達と堅い約束は出来ないのです。

「明日遊びに行くわね」と云つた所で、家へ歸つて見ると、急にお母さんにお使ひにやられたり、お父さんのお供を仰せつかつたりするので、私たちは自分の體で決して自分の自由にはならないんです。何日お友達と約束しても

「お母さんに聞いてね」とか

「家で好いつて云ひましたらね」と假約束ばかりなのです。

ですから、私たちの仲間では決して約束が約束にならない場合が多いのです。何時か、お母さんに、私たちは眞箇に自由に自分で物事を決められないと云つて不平を云ひましたら、お母さんは平氣で

「女つて者は皆さうよ、お母さんだつて、お父様のお許しを受けなければ何だ

つて決められないんですもの」と云つてました。
真箇に私たちは詰らないと、その時思つたのです。

理解あるお友達

「それぢや宜いことがあるわ私明日の朝早く、貴女のお家へ行つて、縫ひ直す所だけ手傳つてお午までに上げちまひませう」

と、江藤さんは云つてくれました。

「あら、嬉しいわね、でも又先生に見付かるかも知れないわね」

「見付かつたつて好いちやないの私に手傳つて貰つたと云へば——」

「だつて、そんな圖々敷い事云へないわ」

「貴女が……好いわ私さう云つて上げるわ、私の手傳はして頂いたんですつ

て、先生に見付かる前に云へば——」

「大丈夫でせうか」

「大丈夫よ」

「それぢやお願ひするわ」

「え、好いわ、それでは私、お母さんに聞いて宜いつて云つたら明日の朝九時までにお家へ行くわ」

と、そこで電話は切れました。

ほんとにお友達には有難い。理解のあるのはお友達ばかりだと私は泌々思ひました。

これで、明日の朝九時に江藤さんが来て下されば、お午までに充分縫ひ直せるし、松竹館は先達、お母さんが風邪を引いた時に、夜中に何度も起きて米枕

を取り代へて上げた御褒美に許されてゐるんですから行かれるし、先刻までト
テモの悲観の日曜だったのが、急に明るくなつたやうで燥ぎたくて堪りません。
寝る前にお布団の上で女中の竹やお角力取つてお母さんに叱られちまひまし
た。

矢張りクラ、ボー

所が、翌日の朝、九時になつても、十時になつても江藤さんは来ません。私
は、とうにお仕事を出して、縫ひ直す所を解いて、縫ひ直しに掛つてゐるので
す。私は心配で堪りません、江藤さんは到々来られないか知ら。江藤さんが来
て下さらなければ、どんなに急いだつて午後三時や四時にはなつて終ふ。晩は
出られないに決まつてゐる。

「あゝ、私困つたわくく」私は獨りで焦つて居ます。

「お嬢様、お手紙です」と、竹やが持つて来たのは、江藤さんからの速達でし
た。

「取急いで申します昨晚の電話を母が聞いて居ましたの、そしてお友達の縫物
を手傳つて上げたりしてはお稽古にならないぢやありませんかつて叱られて終
ひました。ですからお午過ぎに行けたら行きます。萬事は其の上で——又電話
を掛けて聞かれると不可ませんからお手紙で、かしこ、いま午前七時半よ、澄
子」

としてあります。

「江藤さんのお母さんも矢張り舊弊なのね」
と、私は落膽して終ひました。併し、お午になれば江藤さんが、被居やるか

「又何とか相談すれば巧い工風があるかも知れないと思つたので、私は夢中で縫ひ直し始めました。」

「お嬢様、御飯ですよ」と、竹やが呼びに来た時には、おくみも付け直ししてありました。

私が大急ぎで御飯を食べてゐる所へ江藤さんが見えました。私は御飯を半分にして、お部屋へ來ると、

「どうしませう〜」と、江藤さんに云ひました。

「あとの位なの？」

「袖と裾廻しよ」

「そんなら譯はないわ、大急ぎでやりませうよ、二人でやれば二時頃までには縫ひ上るわ。さうすれば、あの前のポーリンギャロンを見なくつたつて「街の

女王」だけは見られるわ」

「あらさうね、断然さうしませう」

それから二人は夢中です、私が袖を縫つてゐる間に江藤さんは裾廻しから袂ふきをくけてくれるのです。でも、頭はとうに映畫館に行つてゐます。

どんな縫ひ直し方か知れませんが二時には出來上つたので、私達は直ぐに出かけました。

「暗くならない間に歸らなくては不可ませんよ——」と、お母さんに云はれたのも上の空、松竹館へ駆けつけたのは三時過ぎでした。それでも目當の「街の女王」が完全に見られたので、怎麼に私達は嬉しかつたでせう。

「何とか彼とか云ふ人があつても、矢張りクラ、ポーは素敵ね」と二人は感心して歸つて來ました。

二人で列んで

かうして活動は見ましたが、借て翌日、先生に出すお裁縫が心配です。

「お友達に手傳つて頂いたりして、不可ません、もう一度縫ひ直してゐらつしやい」と、云ふ先生の顔が眼に見えるやうな気がしてならないのです。

第四時間目がお裁縫なのです、私は怖々お裁縫を持つて裁縫室へ行きました
「大丈夫よ、私が先に云つて上げるわ」

江藤さんはさう云ひ乍ら私の前へ立つて行きました。

順々に宿題のお裁縫を先生のお机の上へ出しました。私の番になると江藤さんが、

「さ、お出なさいよ」急突くのです。

私は仕方がないので先生のお机の前に立つて、その裕を出しました。

「出来ましたね」と、先生は莞爾と笑ひながら、まづ棲の所をめぐつて見ました。

私はヒヤリといたしました。その時、傍に居た江藤さんが

「先生——」と、云ひました。

「え？」と、先生が此方に向きました。私は江藤さんの云ふ事を聞いて先生がどんな怖い顔をなさるか、とても堪らないので下を向いてゐました。併し江藤さんは平氣です。

「あの、私、昨日平澤さんのお宅へ遊びに参りましたの、爾うしたら喜代子さんが、折角の日曜なのに一生懸命お裁縫をしてゐらしたので、お氣の毒になつて、その裾廻しの所を手傳つて上げましたの——」

と、一気に云つて、先生が何か仰有りさうにすると

「先生、私がお手傳ひしたのが悪かつたら御免なさいませぬ。喜代子さんが悪いんぢやありませんから——」と、云つて江藤さんはお辭儀をしました。私もそれに釣り込まれて思はずお辭儀をしました。そして先生が、何と云つて叱るか覺悟を決めて、そのまゝ下を向いてゐました。

と、先生は何にも仰有りません。私たち二人を凝と見詰めてゐるやうな気がしたかと思ふと、先生は、お机の向ふ側からクルリと廻つて、私と江藤さんの列んでゐる間へ入るなり、突然、両手で私達二人を抱えて、御自分のお顔をさげて、二人の顔を覗くやうに見ながら莞爾と、さも嬉しさに笑顔になつて「まあ、貴方は眞箇に正直な方だね、え、好うございますとも、あの江藤さんが手傳つて上げたの——昨日の日曜をお二人仲好くお裁縫をなすつたの？」

さうですか、先生はお二人が斯う向ひ合つて、何か學校のお話をなさりながらお裁縫をなすつてゐる所が眼に浮ぶやうですわ、何もお稽古ですもの、江藤さん好く手傳つて上げましたね、先生は遊びに行らしてもお裁縫をなすつた其のお心掛けが眞箇に嬉しう御座いますわ」

と、先生は私たちに頬擦りなされるやうにお顔を近く寄せて斯う仰有いました。私は斯う先生に仰有られると、何か急に氣恥しくなつて返事が出来ません、たゞ譯もなくお辭儀をしました。江藤さんもお辭儀をしてゐます。

先生は、又お机の所へお戻りになると、

「皆さん——」と、生徒たちに呼びかけて置いて、

「あの、江藤さんは昨日の日曜に平澤さんのお宅へお遊びにお出でになつて二人でお裁縫をなすつたのださうですが、皆さんも假へ遊びながらでも、江藤さん

や平澤さんのやうにお裁縫をなさるやうなお心掛けになつて頂きたいと思ひますわ」と、仰有いました。

「まア——」

「ふゝゝゝ」と云ふ聲が彼方此方から聞えました。「まア——」と云つた方は感心した方でせうが「ふゝゝゝ」と云つた方は、私と江藤さんとがクラ、ポーを見に行つた事を知つてゐる方なのでせう。私は今朝學校へ來ると直ぐに、吉添さんなど、私達のグループの方に「街の女王」のお話をしたからです。私は氣恥しいやら、叱られずに済んだので嬉しいやら、極りの悪い思ひをしてお席につきました。

先生へお手紙

その日の學校の歸りです。皆と一緒に電車道まで出る間の蒼蠅いこと。

「私もこれからさうしませう、宿題は何でもお友達に手傳つて頂いて、活動寫真を見に行くことに決めたッ」

「私も、江藤さんや平澤さんのやうな心掛けになりませう」

と、戸田さんや吉添さんはさう云つて冷かすのです。

「蒼蠅いわよ」と、私は云ひましたが、何だか先生に對して済まないやうな氣がしてならないのです。

その晩、私は江藤さんの家へ電話を掛けました。

「私、何だか先生を騙かしたやうな氣がしてならないわ」と、云ひますと、江藤さん

「私も——ですから明日、私、先生に活動寫真へ行く爲にお手傳ひした事を云

はうかと思つて」と云ひました。

「私、これから先生の所へお手紙で詫まらうと思つてゐるのよ」

「それも好いわね、私もさうしませう」と、云ふので、私はその晩、先生のお宅へ宛て、手紙を出しました。

けふ先生に褒められて気がとがめてなりません。活動寫眞を見に行くために江藤さんに手傳つて預いたのです。先生に濟みませんから御詫びいたします。

平澤喜代子

山上先生御許へ

と、云ふ意味でした。

火曜の午後、私と江藤さんは教員室へ招ばれました。

然し、山上先生は決して憤つてはおいでになりません。二人を列べて

「貴女方は、気がとがめたと云ふ事と、先生に濟まないと云ふ気があつたゞけで澤山です。其のお心掛けをお忘れにならないやうにね。でも活動寫眞などを餘り見にお出でにならない方が好ございますよ」と、優しく云はれました。

一週間許り経つと父兄會がありました。私の家からはお母さんが行きました。山上先生は、私が先生の所へ出した手紙をお母さんに見せて一切を話したらしいのです。

「でも喜代子さんは正直で何よりです」と仰有つたさうです。お母さんはその日學校から歸つて來ると、竹やに

「私もこれからセンチ尺を使ひますから、竹やもセンチ尺でお針をお覺へよ」と云いました。

「あら、何故ですの？」と、竹やも不思議がると、お母さんは

「喜代子の今度の裕も私がセンチ尺でなく、日本尺で断つたために、喜代子が到々先生にお詫びの手紙を出さなくちやならないやうになつたんですものね」と笑ひました。

同情心の行方

浅草まで歸る途

「あのう、お嬢様々々々」
と、背後から呼び止める人があります。朝、學校への途中です。電車を降りて三町許りある學校へ急いで行く時でした。
偶と願へると、其處に六十ばかりになる紡績の被布を着て杖をついたお婆さん

んが困つたやうな顔をしてゐました。

「私ですの？」と聞くと。

「え、あのう、此所から浅草まで参りますにはどう行つたら宜しいんでせう」と道を聞くんです。

「あの青山一丁目から萬世橋行きの電車に乗つて、萬世橋で浅草行へ乗換へるんですわ」

と、私は何の氣もなしに教へますと、お婆さんは、何だかモヂくしてゐましたが

「い、え、歩いて行く道なんです」と云ひました。

「えつ、歩いて？」と、私は驚いて終ひました。

「あら、青山から浅草まで二里もあるわ」と、云ひますと。

「でも、歩かなければならないんです」とお婆さんは如何にも困つたやうに云ひます。

「あら、怎うして？」

「お金を失して終つたものですから……」

「まア、お氣の毒ね」

と、私は思はず同情して終ひました。

「今朝早く青山の娘の嫁づいてゐる所を訪ねたのですけど解らないので、歸りの切符はなし仕方がありませんから、これから淺草まで歸りますの……」

と、お婆さんは杖の上へ額を乗せて悄れてゐました。

「それでは、失禮ですけど、私が電車賃をお立替しときますわ」と、私が墓口から拾錢白銅を出しますと、お婆さんは急に頭を上げて

「これはくまア。御親切様に、淺草へ歸りましたら直ぐにお返し致しますから、お所とお名前を——」

と、お婆さんは喜びながら二度も三度もお辭儀をして拾錢を受け取りました。そして私の所番地を聞きながらののです。併し私は拾錢のことで住所や名前を云ふことはないと思つたので

「名前なんか好いわよ」と、云つたまゝ電車に乗る方面だけ教へて、學校へ急ぎましたが、何だか自分が良いことをしたやうな氣がして嬉しくて堪りません。私は學校へ行くと直ぐにお友達に話したのです。

憤慨 大憤慨

「私、今朝可哀相なお婆さんを助けたのよ」

「あら、どうして？」

「青山から淺草まで歩いて歸るんですつて、電車賃がないんで——ですから私拾錢上げたのよ」と、云ふと仲好しの徳永さんが急に吃驚したやうな顔をして

「あら、厭だ」と、云ひますと

「そのお婆さん紡績の被布を着て竹の杖をついて居なかつた？」と、傍に居た三浦さんが云ふんです。

「まあどうして御存知なの？」と、私が怪訝に聞きますと

「厭あだ。私はそのお婆さんに電車の切符を取られたわ」と三浦さんが云ふのを待たず徳永さんは

「私は小さいお金がなかつたので五拾錢上げちやつたわ」と云ひます。

「貴女も——」と三浦さんが驚く顔に、三人顔を見合せて

「まあ——酷い」

「私には本郷まで歩くつて云つたわ」

「あら、私には小石川つてたわよ」

「あゝ云ふのね、詐欺つて云ふのは」

「憎らしいわね」

と、三人大憤慨です。所が後で聞くと、まだ他にも此のお婆さんに同情してお金や電車の切符を取られた方が随分あるのです。

「仇討ちしてやりたいわね」と云つたのは私です。

「明日の朝、學校の近所に居たら大勢で行つて押搦つてやりませう」と、三人は約束したのです。

女學生はお跳ねか

所が、その翌日はさすがに來ませんでした。四日許り経つた或る朝、私たちは、未だ授業が始まらないので校門の中で、一年生の持つて來たお手玉を取り上げて巫山戯てゐますと、赤坂田町の方から來る芳野さんは周章しく駈けて來て

「居たわよ、居たわよ、けふはね、あの丹後町の角にあのお婆さんが——」と知らせました。

「さう行つて見ませう」何事によらずお頓狂だと云はれた私が一番に駈け出すと、何れも茶目仲間の徳永さんも三浦さんも、それから芳野さんも駈けて來ました。

見ると、例のお婆さんは、私たちが反對の方から來るとも知らず、又誰か詛されさうな人でも探すやうに向ふを一生懸命見ながら郵便函の傍に立つてゐました。

「まア——お婆さんツ」と、私が急に行つて嘔鳴ると、始めて吃驚したやうに此方向き直りましたが、其處に皆が立つて居るのを見ると、急に「いひ、いひ」と笑ひ出して

「皆さんお揃ひで、先達はどうも有難う御座いました。お蔭で助かりました」と云つて悪怯れもせずお辭儀をしました。

皆は呆れて終ひました。まア何て圓々しいんでせうと私は思ひました。私は腹が立つてなりません。

「酷いわね、ふんたはお婆さんの癖にツ」

と、私が云ひますと、

「いひ、ですからお禮を云つたんですよ」

と、お婆さんは反對に押搦ふやうに云ふのです。

「お金返して頂戴」と徳永さんが云ひますと、お婆さんは平氣な顔で

「折角頂いたのですから返すのは御免ですよ、はい、左様なら」

と、すたくくと向ふへ歩き出しました。

「まあ頼む」と、三浦さんが云ひましたが、皆はこれ以上どうすることも出来ません。

「交番へさういつてやりませうか」

と、私が云ひましたが、皆は返事をしませんでした。

所へ、思ひかけず若いお巡査さんが巡回して來ました。そして私たちの様子

が只事でないと思つたのでせう。

「なんです」と笑ひ乍ら聞きました。私たちは云はうか云ふまいか、お互に眼顔で相談し始めたので、

「どうしたんです」と、又お巡査さんが聞くのです。私は思ひ切つて、

「あそこに行く、あのお婆さんはね、私たちを欺してお金や電車の切符を取つたんですよ」

と、私が指差すると、

「あの婆が——」、と餘程氣の早いお巡査さんと見えて「宜しッ」と云ふかと思ふと

「貴女がたもお出でなさいッ」と命令するやうに云つて駆け出しました。そして未だ一町とは行かないお婆さんに追付きました。私も面白半分にお巡査さん

について駆け出しましたので、皆も恐い物見たさのやうに駆けて来ました。

「此の婆、太い婆だ、交番へ来いッ」

直ぐもう丹後町の交番は四五間ですからお婆さんは否應なしに交番へ連れて来られました

で、私たちもお巡査さんが聞き度いことがあると云ふので仕方がなく交番へ来ました。そしてお巡査さんから聞かれるまゝに、皆でお婆さんに欺かされた話をしました。お婆さんは平氣な顔をして居ます。そして

「へん、今時の娘はお跳ねが揃つてゐる」

と、憎まれ口を利きました。

「黙つてゐろ、婆ア」とお巡査さんは、私と三浦さんと徳永さんと芳野さんの名前と學校と住所父の職業などを手帳に付けますと、

「いや御苦勞でした。さ、早く學校へいらつしやい」と、云ひました。私達がお巡査さんにお辭儀をして歸らうとすると、今まで少しも氣が付きませんでした。だが、交番の前は大變な人群りだつたのには驚いて終ひました。それは私達とお婆さんが交番へ連れて来られてゐたのが物珍らしかつたのでせうが、私たちは極りの悪い思ひをしました。

「婆は警察へ来るんだ」とお巡査さんはお婆さんを連れて行きました。

新聞に出た女探偵

すると翌朝の新聞を見て私は勿論家では驚いて終つたのです。

▽○○高女生が老女賊を捕ふ△

最近赤坂青山邊に出沒して通行人を捕へ電車賃がなくて淺草や下谷まで歩

いて歸ると憐れに持ち掛けて金銭や電券を詐取する老婆あり昨日午前八時頃赤坂區青山二の五大東製鋼社長平澤敬二氏長女喜代子（一六）さんに同様手段に出でんとしたのを喜代子さんは早くも看破し同區丹後町交番に訴へ出たので立番中の巡查齋田元次郎氏が出張取押へ表町署へ引致取調べると、此の老婆は埼玉縣生れ目下住所不定窃盜前科三犯にて「又呉れのお常」と異名を取つた小股お常（五一）と云ふ強か者にて萬引板の間稼ぎにて去る十一月出獄した者で、杖を突いて老齡を粧ひ前記の始末に及んだ旨自白したが同署では引續き餘罪取調中

と、書いてあるのです。家のお父さんは、通信社あたりの通報員が聞き噺つて新聞社へ知らせたのだらうと笑つてましたが、此の記事で見ると私が一人で何かしたやうで私は全く困つて終ひました。私は學校へ行くと早速先生に調べ

られましたので、徳永さんや三浦さんにも来て頂いて事情を話したので先生も能く解つて下さいましたが、知らない方からは「女丈夫」だの「女探偵」だのつて冷かされて困つてしまひました。お蔭で私の名は學校中に廣まつて終ひました。全く迂濶に頓狂な真似をするものではありません。此の時のお話はそれで終ひですが、その次は？

燕の子のやうに

「困るわね、困るわね」

「ほんとに困るわね……」

學校が終つて、校門も出て一町半も來ると今まで泣き出しさうだつた空から急に雨がさつと降り出したのです。朝の間はお天気だつたので誰一人傘を持つ

てありません。夏なら日傘がありますけど、寒い冬の頭から大雨を浴びては堪りません。私達は夢中で其所にあつた知らぬ家の軒下へ駆け込んだのです。併し雨は一向に歇みもしなければ小降りにもなりません。私達六人は燕の子のやうに其の御門の軒下で押しくら權兵衛をしてゐるのです。

「私、困るわ」

「貴女ばかりぢやないわ、私だつて困るわ」

と、お互に困りつこをして居ます。此の時偶と私が好い事を考へついたので

「好いわよ、私は傘がなくつたつて雨に鳥渡も濡れないで歸れる方法を考へついたので」

「駄目まで待つんでせう」

「ほゝゝ、そんな智慧のないのぢやありませんわ」と云つてゐる所へ、通り掛つたのは市内一圓と云ふ札をつけた自動車でした。

私はスツと手を舉げて其の自動車を呼んで此の御門の前へ付けさせたのです

「さ、乗りませう」とばかり私は一番先へ乗つて終つたのです。

「まア、平澤さん達者ね」と云ひながら徳永さんが乗りますと、三浦さんも

「これなら濡れないわ」と云つて乗つて来ました。他の方々は多少遠慮しましたが、私は

「好いわよ、私がお送りしますから……」と云つたので皆乗ることになりました。五人乗りへ六人無理に押し込んで、

「一番近いのは吉添さんね」と順に送ることにして走り出しました。

「私、自動車なんかへ乗つて歸ると叱られるわ。生意氣だつて——」

「だつて雨に打たれて風邪を引くより増ちやありませんか」

「肺炎にでもなつたら大變だわ」

「自動車賃より高いわ」

「あら厭だ、肺炎と自動車賃と一緒にする人があつて！」

「ほゝゝ、ほゝゝゝ」

自動車の中は賑かです。到頭唱歌を歌ひ出して終ひました。

風邪を引かれては大變

吉添さんのお家へ附くと、お母さんが出ていらしたので私が叱られないやうに

「雨に打たれて風邪でも召すと悪いからお送りしたんですの」と云ふと、徳永

さんが

「冬の雨に打たれると肺炎になるさうですからお送りしたんですの」と云ひました。吉添さんのお母さんは呆氣に取られながらも

「どうも有難う御座いました。全くですわ、風邪でも引かれては何にもなりませんわ」と云つて、財布からお金を出して

「これ失禮ですけど自動車賃に……」と壹圓紙幣を二枚お出しになりました。「それは好いんですの……まだ大勢さんお送りするのですから」私はお断りしたのでしたが、が、お母さんは無理にも仰有るので徳永さんが、それでは却つて悪いからと云ふので壹圓だけお預りしました。

自動車は又走り出しました。次ぎの芳野さんのお宅でも、三番目の小久保さんのお家でも一圓づゝお金を下さるので私達は困つちまつたのです。

「何だか悪いわね」と云つてゐる間に三浦さんのお家へ行くと、三浦さんのお母様は運轉手に二圓お拂ひになつた上に別に心付けだと一圓お遣りになつたのです。徳永さんのお家でも壹圓出されたので、私は家へ歸つても拂ふ譯に行かなくなりしました。どうせ皆さんの家は赤坂と麻布ですから、そんなに遠くはないのです、運轉手は

「どうも有難う御座いました」と云つたまゝ三浦さんのお宅でお金を頂いて居るので、私のお家では貰はずに歸つて終ひました。

「お母さん、私、皆さんに悪いわ」と云ひますと、お母さんは

「女學生の癖に自動車なんか乗り廻したりなさるからよ」と云はれましたが、「それでは、家からも明日お金を持つて行つて、皆さんに等分にお返しすれば好いわ」と云つてくれました。

相談した金五圓

それで翌日私は三浦さん以外四軒からお預りして来た四圓に、私のお家から一圓足して五圓を持つて行つて、學校で三浦さんで出して頂いた三圓を六等分して一人前が五十錢として皆さんに五十錢づつ、又三浦さんに二圓五十錢お返しするやうにしましたが、一番先きに徳永さんは

「だつて私は一番遠かつたんですもの、六等分では他の近い方に悪いわ」と云ひ出したので

「私もそれでは悪いわ」と云ふ方が出て来て却々受取らないのです。

高女生なんてつまらない所で遠慮するものです。
すると氣短かな三浦さんが、

「そんなに面倒なら此のお金を今朝の新聞に出て居た四谷の孝行息子と云ふのに送つちまいますよ。可哀相ですから——」と云ひ出しました。

「え、それが好いわ」と第一に賛成したのは徳永さんでした。

「ほんとに私も賛成だわ」と、私も云ひ出しました。吉添さんと芳野さんと小久保さんは今朝の新聞を読んで居ないので、その孝行息子の事を知らないのでした。

「その孝行息子と云ふのは怎ふ云ふの？」と吉添さんが聞きましたので、三浦さんが説明しました。

「四谷鹽町の卵屋さんの店から昨日の夕方、店の賣溜のお金を盗んで逃げ出した十三四の男の子があつたんですつて、それを捕へて警察で調べると、四谷傳馬町何番地とかで、お母さんと内職の二人暮しをしてゐる息子さんでお母さん

が病氣になつてもう暮せなくなつたんですつて、それでお母さんに何か食べさせたさに遂盗んだんですつてさ、そして警察署でも大いに同情して居ると書いてあつたわね。孝行息子の盗みつて云ふのよ」と云ひましたので

「まア可哀相ね、それぢや私達も賛成するわ、爾うしませうよ」

と、これで皆の相談は纏まつたのです。ですから私達は教員室から新聞を拜借して、其の息子さんの住所四谷傳馬町一ノ三山岸方大前賤男―假名―と云ふのを調べたのです。

「假名では書留郵便を送つても駄目だわね」

「それは四谷警察へ送つて渡して頂けば好いちやありませんか」

「それが好いわ」と、私達は學校の歸りにその五圓を郵便局へ寄つて小爲替にして、手紙は文章の上手な徳永さんが書いて、四谷警察署長様宛に書留郵便で

出しました。

お母様に孝行したさに盗みをした可憐な少年に些少ながら封入のお金をお渡し下さいませ。

△△高女三年生有志

と、斯う書いてあるのです。私たちは又何だか良い事をしたやうな気がして嬉しくて堪りませんでした。

お母さんへ報告

私は家へ歸ると、此の事を早速お母さんに話しました。

「皆さんが遠慮して受取らないので到頭爾うしたんですの——」と、云ひますと

「そりやまア好かつたわね」と、お母さんも喜んでくれました。

私は、その時全く幸福だと思ひました。

晩御飯が済んで、私はお母様の傍で編物をして居ますと、夕刊を讀んでゐた

お母様は、急にクス／＼と笑つたかと思ふと、私に

「喜代子さん、此の夕刊の此所を讀んで御覽なさい」と云つて其の夕刊を私に渡しました。

私は何だらうと思つて、お母様の指差した所を見ると

孝子とは眞赤な偽り

手の附けられぬ不良少年

朝刊既報四谷鹽町二山崎鶏卵店にて賣溜金を掻拂つて四谷署に引致された大前賤男(一四)〓假名〓は母親に食べさせたさの孝心からだと申立て、居た

が、其の申立が曖昧なので更に調査すると同人は本所區原庭町二大工職大前源次の長男で性來手癖が悪く手當り次第に盗みを働き去る七月少年保護所に收容されて居たが居堪まらず去る廿五日同所を脱走し所々で搔拂ひを働き晝は活動を見物したり買食ひをし夜は空家其の他に宿り歩いてゐたもので、警察で取調べられると急に泣き出して如何にも孝子らしく出鱈目を云つた事が判明したが同署では係員一同末怖ろしい少年だと舌を捲いてゐる。

と、書いてあるのです。

「まあ、呆れた」と、私は二の句が出ませんでした。

所へ、三浦さんからお電話ですと竹やの知らせで電話口へ出ると、三浦さんは、いきなり

「呆れたわね——」と云ふのです。さては三浦さんも夕刊を見たらしいと思ひ

ました。

「え、不良少年ですつてね、あの四谷の子つて云ふのは！」

「馬鹿にしてゐるはね、——四谷警察へ手紙を出して返して貰ひませうか」

「だけど此方の名前が書いてなかつたから駄目でせう」

「先達のお婆さんと云ひ、今度の男の子と云ひ怎うして私たちは欺されて許りゐるんでせうね……私はもう滅多に人を可哀相がらないことよ」

「私も爾うするわ」

それで電話は切れました。

お母様は改めて私に。

「貴女方の年頃の者は何でも彼でも直ぐに同情して可哀相がりますけど、可哀相がるにも能く相手を見ないと不可いわね」と、云ひました。

映畫事件

自由にならぬ身

「私も行くわ、——」

「そんなら私も行くわ——」

「きつとね」

「それちや午後一時かつきりに目黒の停車場へ集まることにしませうよ」

「目蒲電車の停車場ね」

「え、さうよ、きつとよ、皆さんもね」

「え、遅れたら置いてけ堀よ」

と、土曜の午後私たちのグループの中の七人が約束したのです。

それは、明日の日曜お天気だったら郊外、目黒の洗足の池へボートを漕ぎに行き、行くことだったので。

井上さんが、きのふお兄さんと一緒に遊びに行つてトテモ面白かつたと云ふ話をしたのが始まりで、皆賛成をしたのでした。

併し、私たちお友達同士の斯うしたお約束も、家へ歸つてお母さんに好いと云はれるまでは、決してお約束がお約束にならないことは、前にも云つた通りなので、お互い

「きつとよ」と云ひ合つてゐながらも、その「きつと」は、お互い家へ歸つてお母さんにきつと好いと云はれるだらうと云ふだけの事なのです。

私は家に歸ると夕飯の時にお母さんに許しを得ました。それにはお兄さんが

洗足の池なら危ない事なんかはないと云ふ證明があつたからでした。
かう云ふ時にだけはお兄さんに感謝します。

お氣の毒ね

日曜の午飯が済むと私は直ぐに出掛けました。省線電車で目黒へ来て目蒲電車の待合室へ入りますと、もう、井上さんと三浦さんは来ておりましたし、直ぐ次の電車で徳永さん。来ました。吉添さんと水島さんと、宮部さんが見えませんでした。

「どうしたんでせうね」

「お家で不可ないつて云はれたんでせうか」

「水島さんのお家は随分自由なのよ」

「吉添さんのお家だつて、お母様は理解があるのよ」

「宮部さんのお家は？」

「宮部さんのお家は鳥渡かすると駄目かも知れないわ、お氣の毒ね」

「あら、どうして！」

「どうしてつて宮部さんのお母さんは天理教のミーコートつて云ふんで、そりや奮弊なんですつて、何でも天理様へお伺ひとかを立てゝからでないとして下さらないんですつてさ」

と、三浦さんが拜む真似をしたので、皆はクス／＼笑ひ出しました。

そこへ水島さんと吉添さんが遅れ馳せにやつて来ました。

「まだ一時にならないでせう」

「私遅れたかと思つたわ」と二人は省線電車から駆け上つて来たので息を切つ

てました。吉添さんは言ひ譯をするやうに

「私、もう少しで来られなかつたのよ、私のお母さんたらね、私がお母さんたらね、私がボートを漕ぎに行くつて云つたら、毎晩お仕事をしながら姐やと競争で船を漕ぐ癖に、ボートなんか漕ぎに行かないでも好いわ——なんて出してくれないんですもの」

「ほゝゝゝ」と皆は噴笑して終つたのです。

「それでもね水島さんが迎ひに来て下さつたので助かつたのよ」

と、吉添さんは水島さんに感謝しておました。

「吉添さんのお母さんたら私にね、——あの夜になつて静子が船を漕がないやうに、けふは厭になる程漕がしてやつて下さいねですつて……」

と、水島さんも云ふのでした。

「吉添さんのお母さんは眞實に面白い方ね」

と、皆に大評判です。

「あら、もう一時よ、愈よ宮部さんは駄目なのでせうか」

と、三浦さんが云ひますと、急性の井上さんが

「もう行きませうよ、告知板へ先へ行つたと書いとけば好いわ」と云ひ出したので、皆も、

「それぢやさうしませうよ」と、ぞろぞろ驛の告知板の所へ来ますと、早くも三浦さんは、そこに書いてある字を見付けて、

「あら、宮部さんは私たちより一番先に來て歸つて終つたのよ」と云ひました成る程、その告知板には、

母と一しよにお寺参りに行きますから今日は失禮させていたゞきます。

六 人 様

十二日午前十時

女 子

と、してありました。

「きつと天理オウのミーコートへお伺ひした結果なのよ」と三浦さんが笑ひ出しましたので、水島さんは

「悪しきを拂ひタースケ給へとお寺参りに行つたのよ、きつと——」

「さうだわよ、さうだわよ、宮部さんはお氣の毒ね」と、わい／＼騒ぎながら皆は目蒲電車へ乗つて終ひました。

私たちを見る譯

洗足で電車を降りると池は直ぐ近くです。秋空は高く澄み切つてゐます。郊外散歩の人々で賑はつてゐますが、道がに夏と違つてボートを漕ぐ人は少ないのです。二挺の漕のついた玩具のやうなボートは幾艘も岸に繋いであります。

貸ボート屋の内儀さんも暇さうにしてゐました。

「ボートを貸して頂戴」

萬事は井上さんが承知して借りるのです。

「六人さんなら二艘が宜しう御座いますわね」

と、内儀さんが云ひます。初めてボートに乗る徳永さんと吉添さんを別々に別けて乗りました。

徳永さんはボートの進む方へ向いて腰をかけて終つたので、井上さんに、

「ボートを漕ぐのは後を向いて漕ぐのよ」

と云はれて大笑ひをしてゐます。

私はお兄さんに連れられて牛込見付へも隅田川へも漕ぎに行つたので却々得意なのです。

「かう云ふやうに漕ぐのよ」と徳永さんに教へます。向ふのボートでは井上さんが、吉添さんに教へてゐます。

それでどうやらボートは進み始めました。

「舵は、綱を引つ張つた方へ行くのよ」此方のボートは水島さん、向ふのボートは三浦さんが舵を取つてゐます。

池の畔には折柄、散歩に來た人たちが、私たちの漕ぐのを面白さうに見物してゐます。

「多勢見てゐるんですもの極りが悪いわ、池の真中の方へ行きませうよ」

と、お互に云ひながらボートの舳を池の真中の方へ向けようとした時でした。ばたくくと池の淵へ駈けて來た脊廣服の若い青年が、右手に持つてゐたメガホンで右の方を指しながら

「お嬢さん方、済みませんが。こつちの方へ漕いで呉れませんか、お願いです
お願いです」と云ふのです。

「あら何でせう？」と私たちは譯が分らないのでお互に顔を見合せて漕ぐ手を休ませますと、その青年は

「ね、後生ですから今のやうに、此方へもう少し漕いでくれませんか」

と、池の岸からお辭儀をするのです。

「ボールでも池へ落したんでせうか」と舵を引いてゐた水島さんが云ひました
「さうかも知れないわね」と私が云ひましたので、

「それぢや漕いであげませうよ」と水島さんは云ひましたが、何の爲めに青年が、そんな事を云ふのか聞く勇氣もないのです。

で、私たちは譯も分らず一つ二つ漕ぎ出しました。と、急に私の前で漕いで

わた徳永さんが大聲で、

「あーら、厭だわ」と云ふかと、思ふと、兩手で顔を隠してボートの中へ俯伏して終ひました。

「ど、どうしたのよ」と私が聞きますと、

「早く、早く俯伏してお終ひなさいつてば、私たちを活動寫真に撮つてるぢやないの、——池の淵から！」と云はれて、見ると、その青年と反対側へ活動寫真器を据ゑつけ、銀紙を貼つた照り反し（レフレックス）で、私たちを照しながら、私たちが、巫山戯てゐる所を頻に撮してゐるのです。

「まあ、酷いッ」と私たちは、トテモ憤慨しながらもボートの中へ顔を隠して俯伏して終ひました。

池の岸に見てゐた人たちはワツワツと笑つてゐるやうです。道理で皆が私た

ちを見てゐると思ひました。

断然我等のスター

「どうしませう」

「私、厭だわ——」

と、私と徳永さんが云ひますと、水島さんは案外平氣で

「好いわよ、真中の方へ漕いで行つて終ひませうよ」と云ふのです。

私たちにした所で、何時までも俯伏してゐられませんので、到々思ひ切つて顔を上げ無茶苦茶に漕いで、もう撮せないやうに逃げ出しました。

すると先刻まで横の方で漕ぎもせずに只ボートを浮べてゐた二人の脊廣服の青年が、私たちのボートの傍へ勢よく漕ぎ寄せて來ました。そして、叮嚀に

帽子を取つてお辭儀をしながら、一人が

「あの、私たちは松竹蒲田撮影所の野村監督附きの者ですが、いま水谷八重子さん特別主演の「天使の園」と云ふ映畫のロケーションに来てゐるんです。濟みませんが、貴女がたにエキストラに鳥渡なつて頂ぎ度いんですが——」と云ふのです。

「まア——」と私たちは顔を見合せましたが、水鳥さんは斯う聞いて見ると満更厭ではなささうなのです。殊に水鳥さんは學校でも有名な映畫狂の上に水谷八重子の大信者なので、却つて嬉しさうなのです。

「エキストラつてどうすれば好いんですの」と聞きました。

「もう一度、あそこの所をスイ〜漕いで下されば好いんです。先刻のやうに

「あらさう」水鳥さんは獨りで呑み込んでゐるのです。

「どう、漕いで上げませうか」と水鳥さんは私たちに相談しました。

「私、何だか厭だわ」と私は云ひましたが、徳永さんが

「漕いでも好いわ」と云つて終つたので、水鳥さんが承知しません、

「喜代子さんもお漕ぎなさいよ」と到々私も漕がせられました。

池の淵から三間許り離れた所を向ふの三浦さん達のボートと列んでスイ〜と漕ぎました。すると活動映寫器の傍からはレフレックスで私たちを照り反しながら頻りと活動に映してゐるやうでしたが、私たちも映畫に撮られると思ふと何となく極りが悪いので、下を向いてテレてしまひました。すると、傍に立つてゐた——それが野村監督なのでせう、肥つた監督が、先刻私たちにお辭儀

をした青年の監督助手に向つて

「どうも頼むと自然でないね、お嬢さん方済みませんが、もう一度願ひます」

と云つて、助手に何やら耳打ちをしてゐるやうでした。

仕方がないので、又、今の所を漕いで通りますと、その助手が急に

「キューツ」と變な聲を出したかと思ふと、私たちの顔を見ながらペロツと舌を出し、その次に潮吹のやうな顔をして見せましたので私たちは活動寫眞に撮られてゐるのも忘れて思はず漕ぎながら噴笑して終ひました。そして、その笑ひ出した途端にボートに馴れない徳永さんは擡で水を掬ひ外ね、空漕を引いたので我知らず後へ引繰り返つて尻餅を搗いて終ひました。

「いや、結構でした。大出来大出来どうも有難う御座いました。」とデブの野村監督は嬉しさに御禮を云ひました。

「厭ね、私が尻餅を搗いた所を撮つちやつたんでせうか」と徳永さんは云ひました。

「そりや、きつと撮つたわ」

「厭ね、厭ね、厭アねえ」と徳永さんは困つてゐます。

と、先刻の監督助手のボートが又私たちの所へ漕ぎ寄せて来て

「どうも有難う御座いました。大變に巧く行つたので監督も大變嬉んでゐますこの映畫が出来ましたら早速皆さんに見に来て頂き度いのですが、切符をお送り致しますから何方かの御住所とお名前を伺ひ度いのですが——」

と叮嚀に云ひました。

すると水島さんは嬉しがつて

「それちや皆同じ學校なんですから學校へ送つて頂戴、△立△△高等女學校三

年貞組、私の名は水島歌子よ」

と云つてのけました。

助手の青年は、それを手帳に附けると、

「どうも有難う御座いました」と又叮嚀に御辭儀をして歸つて行きました。

「徳永さんの尻餅が傑作だったのね、ほゝゝゝ」と、皆は手を拍きました。

「随分ね」と徳永さんは憤つてますけど、野村監督が、徳永さんが引繰返つた

のが映つたのを見てトテも嬉しがつたのは事實だから仕方ありません。

「本物の女優だつて、あんな巧くは行かないことよ」

「断然、我等のスター」と、皆は大はしやぎです。

此のボート遊び以來、徳永さんには「我等のスター」と云ふ名が附いて學校でも大評判になつてゐました。

招待券と私たち

皆は此のロケーションがあつてから水谷八重子主演「天使の園」の封切されるのを首を長くして待つてゐました。

廿日許り経つた或る雨の日、水島さんはお午の放課時間に私たちが生徒控所でバラリと出してをやつてゐる所へ駆け込んで來ました。

「來たわよ、松竹から招待券が、而も松竹本社の試寫の招待よ」

かう云はれて見ると、私にしても自分が映つてゐると思へば何となく見たいのです。

「けふの午後三時からですわ」

送達便で送つて來たので見に行くにしても家へ歸つてお母さんに許しを受け

る暇もありません。学校では活動寫真へ行く事は禁じられてゐるのですが、
「何も活動館へ行くんぢやありませんもの——松竹本社の試寫なら好いわ」
と、水島さんは主張します。

「学校の歸りに直ぐ行かないと間に合はないわ」と皆はもう矢も楯もありません。
「行きませうよ、行きませうよ」と否應なしに六人の意見は一致して終ひまし

た。
私は学校の歸りに、そんな京橋新富町の松竹本社まで出かけてはお母さんが

心配しますけど、私だけ抜ける譯には行きません。私は仕方がないので、學校
から家へ電話を掛けました。そして無理にお母さんの許しを得ました。

そして、その「天使の園」と云ふ映畫を松竹本社の試寫室で封切前に見たの

でした。その映畫は女學生や小學生の無邪氣な戯れを取り扱つたもので、「無邪
氣が天使の心だ」と云ふ映畫なのです。それですから徳永さんの尻餅はトテも
素敵な映畫の一場面になつてゐましたので徳永さんは愈よスターになつて終ひ
ました。

私たちは松竹本社で水谷八重子さんにも會ひ、サインの入つたステールも貰
ひました。そしてお壽司を御馳走になつた上に松竹館の招待券を五枚づゝ貰つ
て歸りました。

所が、此の招待券を學校のお友達に上げたのと、私たちにしても、もう一度
見たくなつたので、到々活動寫真へ、——淺草の松竹館まで見に行つたのが悪
かつたのです。

「私たち六人が映畫に映つてゐる」と云ふ事と、「學校の誰彼が松竹館まで見に

「行つた」と云ふ事が忽ち大評判になつた結果、先生の耳に入つて終つたのでそれは私たちのグループでない方がお湯呑場の小使さんなどに話したので先生に知られて終つたらしいのです。

到々私たち六人は勿論、淺草まで出かけた方々は皆代り代り主任の山田先生に教員室に呼ばれて調べられた上に叱られて、お操行點を引かれる事になつて終ひました。

私たちのグループの中で教員室へ呼ばれないのは宮部さんだけでした。

宮部さんのお母様は私たちの話を聞いて

「彼の目に天理様に御伺ひを立て、お暮参りに行つたから好かつたんです。矢張り天理様は悪しきを拂ふて助けて下さる」と云つて、天理オーのミーコートと踊つたさうです。

桃割れ事件

一

「は、は、は」と、父は笑ひ出して。

「夏休みの間は、いつも日本髪に結はして置く方が好い」と云ふのです。

「私も爾う思ひますの……」と母も云ひました。

「厭なこつたわ——」と私は首を横に振りますが、母は。

「爾うしたら少しはお跳ねが直るかも知れませんが、母は。」

陸上競技、百米突を十二秒八のレコードを持つてゐるスプリンターの私ですもの、そりや少しはお跳ねかも知れませんが、何も私の髪を日本髪にしないだ

つて好いと思ひます。

「大體、お下髪に洋服と云ふのは、女の子をお跳ねにするやうに出来るとよ、はゝゝ」

夕餐のビールで顔を赤くしてゐる父は押揃うやうに云ふのです。母も亦、その尾について。

「いゝえ、お跳ねだけなら好いんですけど、第一お行儀が悪くなつて不可ませんの、女の子の癖に人様の前へボンと足を投げ出したり、たまに坐るかと思ふと膝小僧を出し放しだつたり……」と云ふのです。

「そりや爾うよ洋服なら當然よ、スカートが短かいんですもの——」と、私だつて敗けて許りません。

「でも足を投げ出すのは怎う云ふ譯なの！」

「靴下止めで、坐ると肢が窮屈なんですもの——」

「幾ら窮屈だつて、大野の叔母様がゐらしてるのに、足なんか投げ出してゐられては、私が第一嫉が悪いやうぢやありませんか」

「だつて仕方がないわ、大野の桂子さんだつて矢張り爾うよ、洋服の學校へ行つてゐるものは皆爾うなるわ、お椅子に腰を掛ければ誰だつて足が前に出るんですもの——日本座敷が悪いんだわ——」

と、私が云ひましたので、母の方が旗色が悪いと父は見取つたのでせう

「だから、夏休みの間は、日本にしようと思ふんだよ。頭は日本髪、桃割れでも銀杏返しでも好い、着物は袖長にして、帯も扱帯の袴下では駄目だよ、お前も既う十六だから、ちやんとした帯をお太鼓に結んで、夏の間ぐらひは娘らしくして御覽」と、父が云ひました。

「ほ、ほ」と、私は呆れて終ひました。百米突十二秒が桃割れなんか結はれて堪つたものぢやありません。
「明日の朝起きたら貴女もう學校が始まるまで洋服を着ちや駄目よ」と母は私を抑へ付けるやうに云ひます。

二

七月の學校の臨海園から歸京つて來た私は、父が忙しい實業家なので、父だけを東京へ殘して海や山へ行く譯には行かないと母が云ひますので勢ひ母へおつきあひで、臨海園以外には他の方のやうに山や海へ出られないのです。兄は大學の野球選手なので地方の中學から中學へと野球を教へに旅行して歩いてゐますが、私は否が應でも東京にゐなければならぬのです。

それでも、來る秋の女子陸上競技に選手として出る爲めに近く△△大學のグラウンドで練習が初まるのです。私は學校から出る五人の中の選手として大學選手のコーチを受けることになつてゐる矢先きに、父がこんな事を云ひ出したのです。

尤も、父がこんな事を云ひ出したに就いては、私にも落度がない譯ではありません。

其の日、父の親友で大野と云ふ實業家。親戚同様にしてゐるので、その奥様を私たちは叔母様と云つてゐるのですが、その叔母様が來られた時、私が足を投げ出してゐたのです。私は小學校の時から學校通ひは洋服なので——夏休みになつても洋服の方が樂ですから洋服のまゝでゐたのですもの、何の氣なしに畳の上で足を前に出してゐたのです。

「何です。人様の前へ足を投げ出して」とお母さんに云はれて、周章て、引込まましたら膝小僧がニウと顔を出したのです。

「無邪氣で好う御座いますわ」と大野の叔母様は仰有いましたが私だつて少しは極りが悪かつたのです。

所が、その晩、寝る時に布団を敷くと、姐やの竹が私に飛び付いたので、私は足柄を掛けて竹やを引繰返してやつたんです。竹やは時々悪巫山戯して私にお角力をしかるのです。私は瘦せてゝもスポーツで鍛へてあります。デブの姐やなんか負けやしません。竹が私の首に腕を巻き付けて倒さうとしましたので、私は反対に下から抱き上げるやうにして足を後から掛けて叩きつけてやつたのです。

ドシーン。と云ふ音が茶の間にあたお母さんにも祖母さんにも聞えたのです

「何なの！」と母が私のお部屋を見に来た時は、竹やが机の足へ頭を打ち付けて

「お痛たゝゝ」と云ひながら辛而立ち上つた時なのでした。

「女の子の癖にお角力なんか取つて何の事です。——竹やも竹やだわ。お前幾歳になつたの」

と、お母さんは呆れてゐました。暢氣な竹やは

「敗けたり、痛かつたり、叱られたりほゝゝ。お嬢様覚えてゐらつしやい」と、お母さんが行つて終つた後で私の肩をほんと軽く叩いて行きました。

三

その翌晩の夕飯時に、母から父へ此の事が報告されたのです。

それが爲めに暑中は、女子陸上競技の選手たる私を「日本ムスメ」にして終ふと云ふ事になつた譯なのです。

「だつて私、桃割れなんかにつけてお友達が笑ふわ」と私は承知しません。

「お友達が笑ふつて、學校へ行く譯ぢやなし、好いちやありませんか」と母が云へば

「笑つたつて好いちやないか、日本の娘が、日本の娘の風をするのを笑ふ方がお可笑いや」

と父は嬉しさに笑つてゐます。

「でも……何だかお可笑いんですもの」と私は極力反對するのですが、

「そんなら喜代子は相變らずお行儀の悪い真似をする氣なのね」とお母さんも承知しません

「兎に角、日本の着物になつたら少しは違うだらう、ほゝゝゝ」

と、父は笑つて何か樂しさに私の顔を見ながら、

「まア何でも好いから明日は一つ、髪でも結つて喜代子の日本ムスメになつた所を見せて呉れよ、はゝゝゝ、十六と云へば昔なら嫁に行つて好い年だ、はゝゝゝ」

「厭なお父さん!」

「お父さんが、あゝ仰有るんだから貴女もあした髪を結ふんですよ、ほゝゝゝ」
母も一緒になつて嬉んでゐます。

四

翌朝、私起きると、昨日まで着てゐた洋服は何時の間にか、衣桁から影を

消して、亂れ函には大柄な蔦模様のポイルの平常着に、嚙脂の博多の單帶、水色の扱帯と、八ッ橋の帯揚げ、白絹の帯止めが揃へてあるのです。

「おや、到々窮屈な日本の着物を着せられるのか」と聊か悲觀しましたけどお正月か何かでなければ減多に着たことのない和服が珍らしくもあるので、起き上つて着物に肌着を合せてゐますと、母が來まして、

「さ、獨りで着て御覽なさい」

「まア、厭なお母さん、赤ん坊ぢやあるまいし着物ぐらひ着られるわ」

「そんなら着て御覽なさいな——」

と、お母さんも物珍らしさうに見てゐます。私は直ぐに着物を着始めましたが、巧くゆきません、腰帯を締めても何だか具合が悪いのです。

「下前が下つてゐるぢやありませんか」

直ぐに母から槍が出て引張られました。

「おはいより一つ出来ない娘つてありますかね、ほ、ほ、ほ」

母は私を揶揄しながらも手傳つてくれます。帯などは到底獨りでは締められません。お太鼓が恰好よく出来る譯がないのです。洋服ならスカートをスポツと穿いて、上着をスーツと頭から被ればそれで好いものを、帯をしめて帯揚げをして帯止をして、厄介なことです。それを母は一々手傳つて恰好よく着せてくれたのです。

それから顔を洗ひに行つて呆れることには袂が引擦る邪魔になる。姐やに背後から袂を押へて貰つて辛而洗ふ仕末です。

洋服なら勢ひよくブルン／＼と顔を洗へるのに、——何とまア日本キノの不自由なことよ！

父は朝六時頃から交り代り客が来、應接間にゐます。そして八時頃に食事をすると、もう會社からの迎ひの自動車が出来て出て行つて終ひました。

私たちの御飯が済むと、何時も来る白菊美容院の髪結さんが来ました。

「お嬢様がお髪上げをなさるんですつて」と竹やに云ひます。

そして到々私は髪結さんに鏡臺の前へ坐らされて終ひました。

油氣のないお下髪に、椿油を塗りつけられ、梳櫛でスイスイ梳かれます。

痛れないので時々引掛る髪に

「痛たたつ」と私は故意と仰山に云つてやります。母は傍から嬉しうに

「髪結さん關ひませんから思ひ切つて梳いてやつて下さい」と笑つてゐます。

「さう首を動かしては髪結さんが、結び難いぢやありませんか」

母は頻りと文句をつけます。それでも遠が結び上つた桃割れを見ると、自分

ながら好い恰好だと思ひました。

「この髪が今夜一晩持つたら好いけど——あの寝相ではね、ほゝゝゝ」と又母は抑捺ひます。

「それに奥様、お嬢様のは坊主枕ですわ」と竹やが口を出したので

「何云つてんのよ、竹やのやうな寝相なら枕なんか不要いわッ」と、私は云

つてやりましたが、私は今晚から寝るにも氣を付けなければならぬかと思ふと愈々悲觀です。

「矢張り、何とか髪かたちつてお髪をお上げになると、お嬢様はお嬢様らしくお成りになりますわ」と髪結さんが云ひました。随分失禮です。

「年頃に見えるから不思議ですよ」と母は云ひました。

「私けふ此の頭で百米突のタイムを取つて見ようか知ら」と云ひますと

「直ぐそんな事を云ふのね——」と母は抑へるやうに云ひました。

五

その日は窮屈な窮屈な一日でした。何時もなら夏の倦るさをゴロと轉がつても頭に心配はなし、坐らうと起きやうと起居が自由なのに、けふ許りは、そんな譯には行きません、お母さんの前へ坐つてお針です。お午御飯の時に立たうとしたら肢に痺れが切れて立てません。

「厭だわ、お母さん……」

「ほゝ、お跳ねさんには好い薬よ」

午後の五時頃、父は歸ると直ぐに風呂に入ります。その後で、私が母と一緒に御風呂に入りますと、母は笑ひながら

「さ、喜代子さんお化粧して御覽なさい」

「厭なこと、お白粉なんか付けるの——」

「女の身だしなみよ」と、母は化粧水とお白粉を私に渡さうとしますが、私は百米突十秒がお白粉なんか付けて堪るものかと思つてます。

「貴女は餘り陽に焼けない質だから、お白粉が好くのわ、きつと——」と、

もう母はお白粉を自分の掌へ澤山に化粧水で溶かして

「さ、私が附けて上げませう」

「いや〜〜」と、私が顔を反向けるのを

「そんな事を云はないで——今夜は一つお父さんを驚かして上げませうよ、貴女が日本ムスメになつて、ほゝ」

私は母に爾う云はれると、父を驚かす好奇心が起つたので、母がするまゝに

お化粧をして貰ひました。

そして湯上りを姿見の前に立つた時は、氣恥しいやうに綺麗にお化粧が出来て、自分ながら初めて女になつたやうな氣がしました。茶の間では。もう父は私たちが来るのを待ちかねて、祖母を相手に夕餐のビールに好い機嫌になつてゐます。

「やア はうう」と、父は私の顔を見るなり相好を崩して喜びました。「む、これでこそ日本ムスメになつたぞ」

と、私の顔を覗きこみます。七十になる祖母も

「ふうう」と笑つて居ます。

「これが貴夫の趣味なのね」と、母は私を顧みながら父に云ひました。父はそれには答へずニコ／＼しながら

「能し、今夜飯が濟んだら大野の家へ喜代子を伴れて行つてやらう。けふは足を投げ出したり膝小僧を出したりしないだらう。わはうう」と、獨りで嬉しがつて居ました。そして御飯が濟むと、否應なしに透矢紹の、訪問着に着換させられて大野さんへ遊びに伴れて行かれました。

六

「まア、ダンチ・シヤンね」と學校でも茶目仲間の大野の桂子さんは私を見るなり手を取つて爾う云ふんです。

「罰なの——竹やお角力を取つたので」と、私は在りし次第を桂子さんに話しました。

「やり切れないわね」と、桂子さんは大いに同情してくれましたが、大野さん

では、御主人も叔母様も大賛成です。

「俺の家でも爾うしてやらう休暇中は——おい桂子、お前も喜代子さんのやうに明日から日本ムスメだぞ——センタン・ガールは不可ん、はゝゝゝ」と大野さんは云ひましたが、私よりも我儘な桂子さんは翌日になつても相變らず、お下げに洋服で飛んで歩いて居ました。

「厭なこつたわ、ベラ／＼袂の着物なんか着て歩けるもんですか」と、翌日遊びに来た桂子さんは私の耳に口をあてゝ云ひました。

日本髪に櫛の入れ方も知らない私。坐れば直ぐに痺れが切れる。寝れば日本の船底枕で首は痛いし、と云つて洋服は母が何所かへ藏ひ込んで出してくれません。

「桃割れにお結びになつたみ姿是非拜見いたしたう存じますわ、さぞかし御

似合のこゝ存じ上げます〔下略〕

勝浦にて 山田とし子

避暑に行つてゐる學友の山田さんから来た手紙が最初で、一週間許りの間に方々へ散つてゐる休暇中の學友にみな私が桃割れに結つてゐると云ふ事が廣まつて終つたらしいのです。

「三浦君よりの便りによれば、君は此の頃断然女になり居るさうぢやないか君は墮落したのか。吾々△△高女の正義團員を以て任する者が、お白粉を塗り桃割れに結ふとは何たるさまか。断然やめれば宜し、さもない時は断然制裁を加へるからそう思ひ給へ」

僕の喜代子殿

君の 徳永よし子

二伸 あなたがそんなになつてしまつては、あたしは寂しいわ
と、男の手紙を書くことが得意の徳永さんは、こんな手紙をくれました。桂
子さんが三浦さんに私の桃割れに結つた事を知らせたので、三浦さんが徳永さ
んに知らせたのでせう。

「あなたも遂に單なる女性でした。桃割れ、振袖、お化粧、さうした外形を
極度に輕蔑する筈の私たちであるのに……あゝ、私はもう貴女に何も申上
げたくありません。たゞ最後の絶交をする前にもう一度あなたの反省を促
します。それは、私たちは外形の美しさを飾るよりも、強く正しき乙女で
あることを希ふと云ふ事であります。

磯貝ちよ子

喜代子様

教會の日曜學校にかゝさず行つてゐる磯貝さんの手紙らしいと思ひましたが
私は誤解されるのが厭で堪りません。私は、さう云ふお友達に一々返事を書く
のが大變なのです。

お客様の前に足を投げ出した事から膝小僧を出した事、姐やの竹とお角力を
取つた事、そして日本髪が父の趣味らしい事、お行儀の悪かつた罰と、父の趣
味と一所になつて、毎日肢に痺れを切らすこと、枕が痛いことまで書かなけれ
ばなりません。いつそのこと、年賀状か著中見舞のやうに印刷屋さん印刷つて
貰はうかと思つた位でしたが兎に角返事を出した方は諒解して下さつたらしい
のです。

(前略) もう貴女は到底選手として出る氣はないさうですね。桃割れなぞに
結つてゐるやうでは、毎朝毎夕のウォーミング(下練習)だつてしてはゐ

ないのでせう。そんな事で十二秒八のレコードを上げられる筈はありませ
ん私は貴女だけは楽しみにして、寺尾さん姉妹以上、人見絹技さん以上のス
プリンターとして世界女子競技會に雄飛する素質のある方だと思つてゐま
したのに——此の秋こそ十二秒五六位に漕ぎつけるだけの練習をして頂く
心算でしたのに——私は、今夜手塚さんから貴女のお噂を聞いて日本の女
子スポーツの爲めに泣いて居ます。(中略)人の噂だけでは解りません。貴女
の御心持ちを遠慮なく御知らせ下さい(中略)愈よ八月廿日から正規の練
習に入らねばなりません。貴女が出ないとなれば補欠を入れる必要があり
ますから至急御返事下さいませ。

藤堂英子

平澤喜代子様

この手紙には全く私は驚いて終ひました。学校の體操の先生からなのです。

藤堂英子先生と云へば女子體育専門學校の第一回出身で、私の學校△△高女
を女子競技界に雄飛させてゐる大恩人です。その先生にこんな誤解されては大
變です。

「お母さん、困るわくく」私は泣きべそを掻きながら、此の手紙を母に見
せました。

勿論お友達から來た手紙も皆見せて、私が桃割れに結はせられた爲めに、ど
んなにお友達から誤解されたか、そして到頭先生にまでこんな手紙を貰はねば
ならなくなつたかを話しました。「まあ、怎うしたら好いでせうね」と母も困
つて終ひました。そして「今夜、お父さんがお歸りになつたらお話しするより
仕方がないわ」と云ひました。

所が、その夕方になるとお父さんは會社から歸ると、直ぐに、書齋へお母さ

んと私を呼んで斯う云ふのです。

「俺はけふ偉い學問をしたぞ、將來の女は、良妻賢母である前に先づ強く正しい女性であれと云ふ事をね——」

「あら、怎うして今頃そんな事を仰有るんですの！」と母が訝りますと、父は笑ひ出して、

「實はな、今日會社の方へ、日本女子スポーツ聯盟の理事と云ふ青年紳士、皆相當な人達が三人やつて来て、家の喜代子に何故お白粉をつけさせたりするんだと嚴談を持ち込まれた。日本女子スポーツの爲めに怪しからんと云ふんだ。それで段々聞いて見たら喜代子は非常な選手ださうだよ。將來は世界的選手になるさうだ。それで僕等に喜代子さんの監督を任せろと云ふんだ。必ず強く明るい女性にして見せると云ふんだ。良妻賢母なんか其の後で好いちやないかと

云はれたが、俺は、そんな事は昔から云ふことだとは知つて居たが、けふこそ其の理窟が眞箇に解つたやうな氣がしたぞ」

と、父は愉快さうに云つて、

「喜代子、關はんから明日からパンツ一つになつて大いに暴れろ——」と煽るやうに私の手を取つて振りました。

後で聞きますと藤堂先生が私が競技大會に選手として出さうもないと云ふことを心配して女子スポーツ聯盟へ報告したので、理事の方々が父の所へ談判に行つたのでした。

私は翌日から又元のやうに身輕になりました。勿論桃割は破壊してしまひました。そして来るべき秋の競技の榮冠を目差して大練習をすることになつてゐます。

然し、桃割れに懲りましたから、もうお客様の前へ足を投げ出すやうなお行儀の悪い真似は決して致しません。

(完)

父の心、母の心

「そんな事をおつしやつたつて、洋服に三味線が持たせられますか」

「持たせられるさ、きのふの新聞にも出てゐたぢやないか、洋服の娘が三味線を弾いてゐる寫眞が出て居つたぢやないか、女子の情操教育には三味線も必要だ」と

「三味線をやらないでもピアノの稽古させてゐるから好いちやありませんの」「ピアノで酒が飲めるか、は、は、は、」

ふと私が眼を醒すと、茶の間でお父さんとお母さんが話合つてゐるのです。

ほんとに厭なお父さん。直きに酒が飲めるかなんて、——それでお父さんは日東製鋼の社長の他に色々な會社の重役なんださうですが、お酒が好きなのが玉に傷だつてお母さんはいつも云つてゐます。

「長唄をやらせるが好いよ、長唄は第一上品で好い——」

「そりや解つてますが、喜代子は學校で陸上競技の選手なんですよ」

「選手が長唄をやつては不可んと云ふ譯もないぢやらう」

「ですからピアノでやれば好いちやありませんか、勸進帳や小鍛冶なぞ皆ピアノで巧い方は弾いてゐらつしやいます」

「ピアノは何所へでも、おいそれと昇いでは行けないよ」

「情操教育の爲めなら、他所へ出かけてまで弾かないでも宜うございますわ」

「は、は、は、所がピアノも好いが、先達も俺が黙つて聞いて居れば喜代子の奴め、何とかの娘の云ふ事にやサイサイ薄曇り——とか何とか碌でもない唄を歌つて弾いて居つたぞ」

「は、は、は、紅屋の娘ですか」

「何だ、お前も知つとるのか」

「その位の歌なら私だつて存じてますわ」

「これは驚いた。お前に教育を任せ切りにして置いたら喜代子は飛んだモダンガールになつて終ふな、は、は、は」

「貴夫の云ふ通りにしたら、直きにお酒を飲むことなんかおつしやるのですも不良少女になつて終ひますわ」

私は床の中で全くだと思ひました。

「そんならお前は喜代子を怎う教育しようと思ふんだね」

「どうつて、體が健康で眞直な氣持ちで成人させれば其れで好い譯ですわ」

「それだけで済むのなら苦勞は要らんさ。體が丈夫で氣持ちが眞直ぐでも、ものが出来なければなんにもならないぢやないか」

「その點なら學校へ満足に行つて、相當の成績を取つて居るんですもの心配は要りませんわ」

「要るさ、學校だけでは女一通りの事は何も出来んよ、琴に三味線に生花にと

「喜代子はそれより日本女子競技大會へ出られる選手ですよ」

「それが心配だて、——いまは選手であるのも好いが、それが嵩じて何とか云ふ女子オリンピックの選手のやうに馬のやうな女になられたら困るぢやないか

女は矢張り女らしくないと不可んよ」

「ほゝゝゝ、喜代子は馬にはなりませんよ」

「それちや肥つて豚になるか」

「まア酷い——私は床の中で憤慨に堪へません。餘程寝た振りをしてゐようと
思ひましたけど黙つて居られません。」

「私、豚なんかになりませんわよお」

と、隣り座敷から到頭聲をかけて終ひました。

「何だ、喜代子起きてたのか！ はゝゝゝ」

と、お父さんが笑ひますと、

「早く寝ないと又明日の朝睡むいわよ」とお母さんは云ひました。

斯う云ふやうに私の事に就いて毎時もお父さんとお母さんとは意見が違ふの

す。

お父さんは私を日本式な娘にしたいのですが、お母さんは何でも健康で活潑な娘にしたいらしいのです。

ですからお父さんは、私が高女を卒業したら、早速日本髪にでも結はせて、茶の湯生花、琴三味線でも習はせ、そして炊事やお洗濯までさせるつもりらしいのですが、お母さんは高女を出たら専門の學校へ入れて、運動でもさせて見たい氣持ちなんです

で、お父さんが其の晩もピアノより長唄を稽古させろとおつしやつてゐたのです。

「そんな事はまア高女を卒業してからでも遅くはありませんわ、それより此の秋の日本女子競技に立派な記録が出せるやうにしたう御座いますわ」

と、お母さんは云ひます。

「は、は、は、此の頃は母親からして娘を女らしく仕様とはしないんだから驚くよ」

と、お父さんは匙を投げたらしいのです。

「喜代子の事は私が一生懸命にしますから貴夫は貞雄（兄さんの事）を考へて下されば好うございますわ」

「男も廿歳以上になつたら放任主義が好いよ——」全くお父さんはお兄さんの事には何にもおつしやらないで、私の事にはばかり口を出すのです、何故だか解りません。

「喜代子に、そんな駆けつこの記録を出させた所で何になるんだね。あそこの娘はお跳ねだなんて云はれるせ——」

「お跳ねでもお轉婆でも私は好いと思ひますわ。そして日本記録を破つて世界オリンピックに出られるやうにでもなれば家の名譽ですわ。そして世界オリンピックで勝ちでもしたら第一日本女子の名譽になりますわ」

「大變な理想を持つてゐるんだね、は、は、は、」

と、お父さんは笑ひ出しましたが、お母さんは真面目らしいのです。

「い、え決して理想ではありませんわ、家の喜代子には、其の素質が充分にあるんですつて、學校の藤堂先生が云つてられましたわ、十六歳で百メートルを十二秒幾らとかで駆けられるのは大變なんですつて——」

と、お母さんが仰有つたのには私も驚きました。

「ですから私は一生懸命に此秋は喜代子に競技を練習させたいと思ひますの」とお母さんが續けて云ひますと、お父さんは又笑ひ出して「お前は何時の間

に、そんなモダン奥さんになつたんだね、はゝゝゝ」

「それには譯があるんですの……」

と、お母さんは云ひましたが、其の先は急にお母さんの聲が小さくなつて、何を仰有つてゐるのか床の中にある私には聞えなくなりましたが何かヒソ／＼話してゐるのです。

「ふゝゝゝ、爾うかはゝゝゝ」と、お父さんの笑ひ聲が聞えました。

私は氣になつてなりませんので、隣り座敷の床の中から「何よお母さんつてば急に小さい聲になつたりして？」と抗議を申込みますと

「未だ寝ないのそんな事では駄目よ運動競技に適度の睡眠は必要なのよ」とお母さんが云ひますと

「はゝゝゝ、お前も却々偉い事を知つとるね、うん母親からして其の意氣でな

くちや好い選手は出来ん、選手大賛成だ」

私はオヤ／＼と思ひました、お母さんが小さい聲で話してから急にお父さんが選手大賛成なんておつしやるなんて不思議でなりません。

併し、矢張りお父さんはお母さんの云ふ事何でもお聞きになると思ふと嬉しくもなりました。

此の頃、私たち選手五人は毎日學校の授業が終ると、四時から五時頃まで學校へ残つて藤堂先生の監督と、文理科大學からコーチに来て下さる山下選手に指導されて、練習を續けてゐるのです。

私と四年の村上さんは百メートルと二百メートルです。四年の北見さんは走高跳とハードルです。五年の芳野さんは八百、古川さんは圓盤と槍投げと全くへト／＼になるまで練習をします。そして毎日記録を取つて、それが少しでも

好いのが出ると嬉しくて堪りません。

そして、毎日の御夕飯の時はお母さんやお兄さんへ其の日の成績を報告するのです。

お兄さんは前にも書いた野球の選手です。

「私、けふ十二秒七が出たわ」

「真箇かい。そりや凄いや、寺尾文子が十二秒四だつたね、もう一踏張りだね」とお兄さんが云へは、

「ですから體を大事にしなくちや駄目よ」

とお母さんは仰有るのです。

お父さんは忙がしいので滅多に私たちと一緒に御夕飯を食べられませんが、それでも早く歸つた日は、私の話を聞きます。そして必ず、

「矢張り好い成績を出すには健康に氣を付けないと不可いらしいな」と云ひます。

「そりや爾うだわ、體のコンデションは悪くては駄目よ」と私は、いつも得意になつて云ひます。

「爾うだ全くだ」

お父さんは到底も私の選手生活に賛成してくれません。

けふは雨降りで練習がお休みなので早く學校から歸つて來ました。

毎時ならへト／＼になる程運動するのでお夕飯が飛び込むやうに食べられるのに、けふは何時ほど美味しくありません。

晩になつて雨が上がりましたが、未だ残暑で蒸々と嫌な氣候でした。

食後の西瓜が冷たくて大變においしいので、二切れも三切れも食べて、四切

目に出さうとすると、お母さんが、

「選手は攝生がたいせつよ、お腹でも悪くしたらどうなるの！」
私は手を引込めました。

其の晩お父さんが歸ると早速お母さんは私が手を引込めた事を話して

「矢張喜代子には選手生活が好いんですわ」と自慢らしく云ひました。

お兄さんはムシャ／＼食べて居ましたが、成る程、翌日お腹を壊してお粥を食べて居ました。

「御覽なさい、貴女の勝よ」と、お母さんはわたしに云ひました。

「凄冷へをしては不可せんよ」とは去年までお母さんが口癖のやうに私に云つてゐたのでしたが、今年からは自分で氣を付けるので、決してそんな事もありません。

学校の茶目仲間、同級の私たちのグループの徳永さん三浦さん吉添さん、その他四人許り合計七人の父兄が學校へ呼び出されました。それは、皆が皆、人並み外れた映畫狂で邦樂座、武藏野館、芝園館と外國映畫なら必ず競争のやうにして見に行くのです。それで一つでも見ないと恥のやうにして映畫を批評し合ふので勢ひ一回でも見に行かないと話が合はないので何を差し措いても見に行くのです。

映畫を見に行くだけなら未だしも、此の方たちは、繪はがき屋を漁つて外國の映畫俳優の寫眞を買ひ集めた上に遙々アメリカまで其の寫眞を送つてサインをして貰つて喜ぶやうな癡り方なのです。

勿論、私も其の仲間だつたのです。ですから私たちは大抵な外國映畫俳優や

監督の名を空で知つてゐます。

所が、此の頃はそのお仲間が決して私をさそひに來ません。

それは私が競技の練習で、土曜日でも日曜でも學校の復習が済みさへすれば早く寝て終ふ事を知つてゐるからです。

そのお蔭で父兄呼び出しから助かつたのです。茶目仲間の映畫に夢中になつて、その中の吉添さんが毎時なら土曜日の午後晝見に行くのを晩に行つて遅く青山の寂しい所を歸つて行つたのを、擔任の先生が見付けたのが始まりで調べ始めますと、茶目さんの中には、學校の御本を買ふと云つてお家からお金を頂いて其のお金で映畫を見に行つた方なぞがあつたのでたうとう父兄を呼び出して注意することになつたのです。

「私とても叱られちやつたわ」

「私は謹慎なの……もう學校の他は一步も家を出られない事になつちやつたのよ」

「私はね、もう一錢もお小遣ひをもらへないことになつて終つたの」

「私はお父さんから學校を下げちまうつて云はれたわ」

と翌日學校で皆は口を揃へて何か私に責任でもあるやうに私に云ひました。

そして

「貴女だけは助かつたのね」と皆は羨ましがります。

併し、考へれば皆の云ふ事も無理はありません映畫狂の方でも私は一方の大將ですから若し競技の練習がなければ無論私もそのお仲間だつたに相違ありません。

お母さんは、徳永さんのお母さんから其の話を聞いて、早速、お父さんに報

告して居ました。そして

「矢張り喜代子に選手生活は好いんですわね」と自慢らしく云ひました。

X X X

愈々日本女子陸上競技大会が神宮外苑に開かれました。

私たちは健康に注意を重ねたお蔭ではち切れさうな競技力と闘志とを以て出場しました。全国から集まつた女流選手は何れも一粒選りの選手の方々ですが私たちのコーチたる山下選手が各地の情報で大體の技倆は判つてゐるので爾う怖れる必要はなさうでした。

各新聞は二三日前から一齊に此の競技を書き立てゝゐます。豫評を見ると百米突優勝候補には京都二條の磯村さん名古屋高女花田さんと私の名が大抵の新

聞に乗つてゐます。

前の晩に家へ来たお客に、お宅のお嬢さんは大した選手なんださうですねと云はれてお父さんは、

「お轉婆で困つて居りますよ」と云ひ乍らも得意になつてゐました。

學校からの應援が三百人も来てくれました。

私は苦もなく百米突は十三秒〇で一等で入選しましたが。名古屋の花田さんは體の調子が悪くて落ち京都の磯村さんは私と同じタイムで入選しました。

コーチの山下選手は、磯村さんを敗かすには二百メートルを棄權して英氣を養つた方が利益だと云ふので私は二百メートルの方は出ませんでした。それが此方の策戦なのでした。

磯村さんは百も二百も入選したので、明日の決勝日にも兩方出るらしいので

す。
その形勢を見た山下コーチは、私の肩を叩いて大丈夫、百米突は此方のものだ
だと仰有つて下さいました。

その晩、私が寝る前、お母さんと兄さんが私の足にアルコールをつけてマツ
サーチをしてくれました。考へれば勿體ない話です。

愈々、けふは決勝日です。氣になる新聞を見ますと、百米メートルで磯村さん
と私の豫想が書いてありましたが、何の新聞も磯村嬢に一日の長があるとして
ありますが、讀賣新聞には春日生と署名して、私が二百メートルを棄權した策
戦を書いて若し磯村嬢が二百に出れば百米メートルには断然私に分があるとして
ありました。私はぎよつとしました。若し磯村さんが此の新聞を見て二百メー

トルを棄權をされたらどうしようと思ひました。

學校からの應援は勿論お母さんも兄さんも付添つて来てくれました。
何萬と云ふスタンドの觀衆に全くけふは晴れの舞臺です私の胸は高鳴りして
ゐます。

私の戦友村上さんも體の加減で豫選で落ちたので、けふ學校の重望を荷ふの
は私の百米メートルと北見さんの走高飛芳野さんの八百メートルです。

所で策戦は圖に當りました。怖らく京都のコーチの方は去年まで名もなかつ
た私を見送つたのでせう。

磯村嬢は二百メートルへ出て立派に優勝しました。併も日本女子記録を破つ
て廿六秒五と云ふ成績です。

「けふの磯村嬢は素敵だぞ」

と、新聞記者らしい人が云つて行くのさへ私には氣になりました。
午後二時十分。

「百メートル決勝——ッ」と云ふ聲が響きました。今まで學友達に足を揉まれて居た私は皆に「しつかりね」と云ふ聲を浴ながらトラックへ現はれました。學校の應援團から嵐のやうな拍手が浴せられました。

私と列んだ磯村嬢は、先刻の疲れを忘れたやうな晴れやかなお顔で初對面の私に會釋されました。私も周章で挨拶しました。恐らく磯村さんにして見れば他の方は眼中になかつたのかも知れません。

出發係加賀のさん拳銃一發、私は夢中です。世の中の何も彼もなく體も壊れよ、足も折れよと許り駆けました

一切は耳にも聞えませんが。たゞ前には誰も居ない事を知つた時はつと思つた

途端です。妾の體は大地へ打ちのめされたやうに叩き付けられました。

「痛たッ」と知つた時には既に、他の選手が勝利のテープを切つた後だつたのです。

いきなり駆け戻つて私の手を取つて引起して下すつたのは磯村さんでした。

「まアスパイクの紐が切れて……」と痛む膝頭を抑へて起ち上つた私の靴を指差したのです。

其所へ駆け付けたのは山下コーチです。私は山下さんの顔を見ると同時にわつと泣いて終つたのです。

山下さんは私を抱へるやうにして控室へ連れて來ました。學友は雪崩を打つて控室へ入り込みました。

X

X

X

「済まない、済まない、あれだけ戦ひ乍ら負けさせたのは全く僕が悪かつたんだ、僕の全く不注意だつたんだ。練習でいたんで居た靴の紐を取り代へさせなかつたのは全く僕の不注意だつた」

と、何度も何度も繰り返して山下コーチは「皆さん——」と應援の學友たちに向つて一段と聲を張り上げて、

「平澤さんは御覽の通り立派に勝つたのですそれを負けさせたのは全くコーチである僕の罪です。僕は皆さんに向つて此の通り謝まります」と帽子を脱いで御辭儀をしました、山下さんの眸には涙が光つて居ました。應援の學友たちも一齊に泣き出しました。

事實私は磯村さんを一米突も抜いて居たのです。それが靴の紐がブツリ切れた爲めに半脱げになつた靴の爪先が躓いて倒れて終つたのです。

「全く注意すべき事だな」と山下さんは繰返して云つて居ます。

スタンドに居たお母さんと兄さんが漸く人を掻き分けて入つて來ました。私はお母さんの顔を見ると又泣いて終ひました。併し、お母さんは笑つて居ました。

「好いの上勝つたつて負けたつて——貴女が體が丈夫になつてさへ居れば其れで澤山、ほ、ほ、」とお母さんはサバ／＼して居ました。そして山下さんが謝まるのを却つて氣の毒さうに、

「いゝえ、負けた方が勵みが出て却つて好いでせう」と云つてました。

その晩、お父さんもお母さんも私が負けたのは一向口惜しがらうともせず、私が體を悪くせず、健康に、映畫狂なぞになつて父兄を呼び出されもせず、済んだのは全く競技のお蔭だと許り云つて、そして最後に、

「これで陸上競技も済んで一段落となつたんですから、今度は何で此のお跳ねさんを釣つて行きますか。ほ、ほ、ほ」ですつて。

何故悪い？

一言ぐらい云つても

「まア貴女随分だわね！」

「だつてえ——」

と、千代子さんは當惑したやうに、私と三浦さんに手を取られながら返事に困つてゐます。

「學校をお止しになるんならなるつて、私たちにだけは一言ぐらひ云つたつて

好いと思ふわ」と、三浦さんが云ふのに續けて

「お手紙を上げたのに返事も下さらないぢやないの——」と私が曇みかけたのです。

「でも——オ」と千代子さんは甘へるやうに云ひながらも、云ひ譯さへ出来な
い様子でした。

學校ではお白粉は禁物でも、學校を止めた千代子さんは、けふは美麗にお白粉を付けてます。紫錦仙の矢絰に嚙脂の帯が恰好よく似合つて、房々したお頭髪を、武子巻きにしてゐるので何だか大人びて見えますが、相變らず人慕こい笑顔の動作です。

高木千代子さんと云ふのです。私たちのグループの茶目仲間なのに、秋になつて九月が終ると、急に誰にも何とも云はず、學校から姿を消して終つたので

した。

「高木さん怎うなすつたのでせうか」と噂し合つた私たちが、先生に伺つても別段學校へは退學届は出てないと云ふのに私たちの寄せ書きの手紙をお家へ出して返事さへ下さらないのです。

「ほんとに怎うかなすつたのぢやないでせうかね」と皆が心配してゐた矢先です。私と三浦さんが何時ものやうに誘ひ合はして學校へ行く途中青山六丁目の電車の乗換場でばつたり千代子さんに會つたのでした。

私と三浦さんは左右から千代子さんの手を取つて終つたのです。

プープーと來た自動車を避けて道の傍へ寄ると直ぐに「貴女随分だわね」が始まつた譯なのです。

お手紙 きつとね

「何故お手紙の返事を下さらないの?」

「何故つて……何だか私悪いやうな氣がするんですもの——」

と、何時にも似合はず千代子さんは伏目になりました。

「あら、怎うして?」と、私は云ひましたが、その千代子さんの様子を見ると、何かな千代子さんに不幸な事でもあつたのではないかと云ふ氣になりました。

「怎うして?」と千代子さんは自分の氣を自分で引き立てるやうにニツと笑つて見せましたが、直ぐに氣を更へて

「私もう學校へ行かれないんですもの——」

「まア、どうして?」

私と三浦さんは思はず眼を睜つて驚きました

「いろく、譯があつて——」

「譯つて何？」

「聞かせてよ——」

私と三浦さんは急突くやうに云ひましたが、千代子さんはニツと無理に笑つたやうな笑顔だけ見せて

「そんなこと一口ちや云へないわ」と投げるやうに云つて

「それちや、その中にお手紙上げるわ、きつと——」

「爾う、きつとね」

「え——」と千代子さんは首肯しましたが、何故か寂しさうに見えるのです。

「いま何所へ行くの？」

「好いところ——それも思ひ切つて手紙に書くわ。死んだ氣で——」

「え、死んだ氣で？」

と、二人は、曾ぞ、そんな事を云つた事のない千代子さんが死んだ氣でなんて云つたので、愈よ解らなくなりました。

「早く行かないと學校が遅れるわよ」と千代子さんも急ぐらしく二人を急ぎ立てました。もう三臺も四臺も電車を遣り過してゐました。

「それちやお手紙きつとね」

「え、さよなら——」

二人は後髪を引かれるやうな氣持ちで電車へ乗つて終ひました。

千代子さんは寂しさうに私たちを見送つたまゝ、そこに立ち佇んでゐました。

別な世界の少女

書いては破り、書いては破り、この拙い手紙を幾度書き直したことでせう。とうてい私の現在の気持ちをお傳へする手紙は私には書けないと悟りました。總てはお察し下さいませ。両親を失つて叔父叔母に育てられた私が、いま叔父の失業を見て安閑と學校通ひをしてゐられる身でない事を知りました。自分の子よりも慈んでくれる叔父叔母の情を思へば思ふほど、私は其の情に甘えてゐてはならないのです。

私は叔父たちが止めるのも聞かず、學校へ行く生徒の身を、澁谷の昭和製菓の喫茶部の女給にしたのです。女給をしながら學校の皆様とお附合出来ないことを知つた私は、何も彼も申上げずに學校を去つたのです。もう皆様と私とは

全く別な世界の少女でございます。皆様が幸福に學校へお通ひ遊ばす時に、私たち——不幸な女給たちはお互に慰め合つて居ります。さらば此の手紙を最後のお別れとしても皆様から手紙を頂かうとは思ひません。皆様も私に手紙を下すつて私を泣かせて下さいませ。學校へまだ退學届を出さずに居りますのは私の悲しい未練からでございます。お笑ひ下さいませ。さらば、皆様御幸福に。

かしく

千代子

お慕しき三年貞組の皆様へ。

センチな涙の珠

表書きは約束した私と三浦さんの宛名ですが、中へは三年貞組全體にあてゝあ

ります。

その千代子さんの手紙が教室の羽目板へピンで貼られました。

「まア、お氣の毒ね」と云ふ言葉が皆の口から叫ばれました。

學問も出来るし愛くるしい茶目さんで、級中の人氣を一身に集めてゐた千代子さんだけに、皆の同情は募るのです中でもセンチの安田さんや清岡さんなどは千代子さんが死んでゝも終つたやうに涙を一ぱい眼に溜めて、此の手紙を繰り返し繰り返し讀んでゐました。

「せめてお送別の記念品でも贈つて上げたいわね」と云ひ出したのは級長の宮部さんでした。

「爾うだわね、」と急ち皆は賛成して、

「それでは明日三十錢づつ持ち寄ることにしませう」が一決して終ひました。

そして其の翌日集まつたお金は五十錢寄附した方もあつたりしたので十七圓二十錢にもなつて終ひました。

「記念品は何が好いでせう」と云ふことになりますと、指環と云ふ者もあり、腕時計と云ふ方があり、反物と云ふ方もあつて却々決らないので結局投票で決めることになりました。

その結果、指環と云ふのが多くて、到々それに極りました。

級長の宮部さんと私と三浦さんが選ばれて、銀座の××時計店へ金指環を注文しました。指環の裏に△△高女三年貞組一同と刻らせました。

千代子さんを圖んで

その記念品が出来て来た日です。三浦さんが、

「千代子さんは怎麼ことをしてゐるか、行つて見て上げませうよ」と云ひだしました。

「だつて悪いわ。それに喫茶店なんて私行つた事がないんですもの——矢張りお家へ届けた方が好いわ」と私は反對しましたが、茶目の水島さんは

「好いちやないの、大勢で行つて千代子さん慰問團だつて云へば——」

水島さんは何でも直ぐに面白く遊ぶことに考へるのです。

「私も行くわ」と吉添さんも割つて出ました。

「だつて喫茶店へ行つて、何にも食へずに用だけ話して歸つて来る譯には行かないでせう？」と聞いたのは宮部さんでした。

「好いちやないの、コーヒーを喫んでスポンヂケーキぐらゐ食へたつて、爾うすれば此方がお客様ですもの、千代子さんのお店にだつて悪かないわ」

と、水島さんは銀座の萬國屋と云ふ大きな果物屋さんの娘さんだけに、そんな事を知つてゐるらしいのです。

「行きませうよ」と吉添さんが又云ふと

「喫茶店見學よ、近代女性は喫茶店ぐらゐ知つてゐたつて好いわ」と三浦さんも断然主張しました。

それで到々一行五人は、千代子さんをお店へ訪ねることになつて終ひました。私は何だかお友達同士で喫茶店まで行くのは氣がとがめてなりませんでしたが、千代子さんの手紙が私の名宛にはなつてゐるし、皆にさう云はれるのに行かない譯にも行かないので仕方がなく跟いて行きました。

澁谷驛の前にある昭和製菓會社の支店喫茶部へ、私たちは學校歸りの荷物を持つたまゝ入り込んだのでした。

千代子さんは恰度男の二人連れのお客に紅茶を出してゐましたが、私たちに気が付くと「まア——」と驚いたやうに眼を睜りました。オリブ色の事務服を着てゐます。

私たちは急ち千代子さんを取り圍んで終ひました。が、この千代子さんの様子を見ると、先刻まで一番強いことを云つて居た水島さんが、一番先きに涙を溜めました。宮部さんは千代子さんの肩に手をかけて口も利けず、臉を潤ませて千代子さんの顔を凝視してゐます。

他に三人許りゐた女給さんたちは、私たちの様子を見て、不思議さうな顔をしてゐるのです。

「でも、千代子さん偉いわねえ」と三浦さんが云ひましたので千代子さんは「ほゝ、偉かないわ、こん事誰だつて出来るわよ」と晴やかに笑ひました。

「まア、お掛けになつて頂戴——」と千代子さんは椅子を直しましたので、皆は卓子を圍んで終ひました。

千代子さんは、他の女給さん達や、帳場にゐる年配の女の人に

「学校のお友達が出来て下さつたの——」と低聲に云ひましたが、偕て、皆をどう扱かつて好いか迷つてゐるらしいのです。

それを察した水島さんは、傍にゐた女給さんに

「あの、済みませんが、コーヒーを頂かして頂戴な」といひました。

「はい——」と他の女給さんは物馴れた様子で奥へ傳へてます。

「千代子さん——」と宮部さんは傍へ千代子さんを呼ぶと

「これね、貞組の皆さんから貴女へ記念品なのよ」と云つて、指環を出して

「この裏に書いてあるでせう。貞組一同つて——」と指環を函から取り出しま

した。

「まア——」と云つた切り、千代子さんは感謝の言葉が出ないらしいのです。

「指に巧く合ふか知ら、氣が付かずに誂らへて終つたんですけど」と宮部さんが千代子さんの手を取つて簞めかけますと、

「千代子さんの指は私と同じですもの大丈夫よ」と三浦さんは云ひました。

「あッ、固さうだわ」と宮部さんが又云ひますと、

「だつて、前に妻の指環が丁度好かつたんですもの——だから妻の指に合はせて誂らへたんだわ」と三浦さんは云ひますが、千代子さんは遠慮して却々簞めやうとしません。

「簞めて御覽なさいよ」と吉添さんに云はれた、千代子さんは遠慮勝ちに宮部さんの前へ指を出しながら

「お掃除をしたり労働をしますから指が太くなつちまつたわよ、きつと——」

云ひましたが、指環は怎うやら簞りました。

皆はほつとしたやうに

「それでも好かつたわね」

「私も後で氣が付いて若し簞らなかつたら、又作り直さなければならぬと思つてたのよ」と云ひ合つてゐました。

皆はコーヒーを飲み、水島さんの指圖でお菓子も食べました。千代子さんは頻りに皆にお禮を云ひましたが

「皆さんが、こんな所へ來てゐるところを見られると學校で叱れますわ」と心配さうに云ひました。

「好いわよ、大丈夫よ、千代子さん慰問團ぢやないの」と水島さんが云ひまし

たので、皆はクス／＼笑ひ出しました。

笑つて終ふと、その店にも馴れたので、千代子さんを中心に色々と話がはずみました。

と、此の時、直ぐ傍で先刻から紅茶を飲んでゐた二人の大學生らしいのが、お勘定を拂つて立ち上ると、外へ出ながら大聲で

「けふ日の女學生なんて生意氣だな、學校の歸りに喫茶店なぞへ來やがつてーは、」と笑ひ合つて行きました。

私たちは皆顔を見合せて黙つて終ひました。

「随分馬鹿にしてゐるわね、私たちを不良少女か何かだと思つてるのよ、あの大學生——」と、水島さんはフンガイしましたが、私は仕方がないと思ひました。それで、私たちも立ち上りました。水島さんがお勘定を皆の分も立てかへて

千代子さんが好いと云ふのも構はず他の女給さんに拂つて終ひました。

なせ悪い

毎日よりも遅れて家へ歸りますと、茶の間に、お母さんと大學へ行つてゐる兄さんがおりました。そして兄さんは私の顔を見るなり、無理に怖い顔をしなから藪から棒に

「喜代子、お前けふ渋谷のカツフェーなんかへ行つたらう」と云ひました。

「え、行つたわ、カツフェーぢやないわ、喫茶店よ」

「喫茶店だつて何だつて——そんな所へ何だつてお友達同士で行くんだ。生意氣な——不良少女みたいに」

「まア厭なお兄さん、不良少女ぢやないわ。私——けふ始めて行つたのよ」と云ふと、お母さんが

「初めてだつて不良少女ぢやありませんか、そんな所へ行くなんて——」と云ひます。

「あらア、御用があれば仕様がないうちやありませんか」と私が云ひましたがお母さんは承知しません

「そんなカツフェーなんか貴女の御用がある筈はありまん、コーヒーを飲んだりお菓子を食べたり、家で幾らでも上げるちやありませんか」と、お母さんの泣きさうな顔

「ほんとに御用があつたのよ、その御用つて云ふのは斯う云ふ譯なの——」
そこで私は高木千代子さんの事から先達途中で會つた事、千代子さんの手紙

に皆が同情して記念品を作つて仕方がなくお友達と持つて行つて上げた話をしたのです。

「成る程、女學生は困ると女給になるつて手があるな、男ぢやさうは行かないが」と兄さんは云ひましたが、お母さんは

「その高木さんつて方出来る方？」と聞きました。

「え、何時でも一番か二番よ」

「まアお氣の毒ね——でも、貴女はもうそんな所へ行つちや不可いことよ」と、お母さんに固く云はれて終ひました。

で、後で見さんに聞きますと、先刻喫茶店で私たちのことを生意氣だと云つた大學生は、兄さんのお友達で、家へも二三度遊びに見えた事があつて、私の顔を知つてゐたんださうです。その日宮益坂で見さんにはつたり會つた時に

「貴様の妹が澁谷のカツフエに居たぞ」と、お兄さんに教へたんださうです。ほんとに内証事は出来ないものです。然し、お友達でありながら、女學生と女給と交際しては何故不可いのか私には解りません。誰か教へて下さい。

不裁縫同盟

「變ね——」

「憊うなすつたのでせう」

「きつと何かあつたんだわね」

私は、いま教壇へお上りになつた國文の得能先生のお顔を見ると、お席を列

べてゐる徳永さんと低聲で囁き合ひました。

それは、その日に限つて得能先生の御様子が変わりました。いつもニコ／＼圓滿なお顔に笑顔を作つて被在やる先生。小肥りに未だ女學生型の抜け切らない、學校で一番お年若な、此の私たちの高女出身の校友で、女子家政科を卒業された先生は、私たちの一番好きな先生なのです。放課時には他の先生のやうに教員室でお茶など飲んで被在やらす運動場で私たちを相手に、繩飛びやらデッドボールなどをして下さる。そして私たちをお友達のやうにして下さるので誰だつて好きになつて終ふのです。ですから得能先生の周囲は何時も生徒たちが取り巻いてゐます。先生が御出勤の時も、お歸校の時も生徒たちは先生と一緒に歩くのが嬉しいのです。

その得能先生が、けふ第一時間目の國文の時間に教室へ入つて來られたのを

見ると、お眼の淵を紅く、しんみりと情れ勝ちで、今まで泣いてとも居られたやうな御様子で、いつものお笑顔を見せては下さらないのです。

思ひは同じ教室一同は一瞥先生の御様子を見ると、お互に眼顔で話し合つて「けふ先生には何かあつた」

「怎うかなすつてらつしやる」と云ふ事が誰にも解つたのです。

先生は濡り勝ちなお聲で出席簿を取られてから、御教授を始めかけましたが堪らなくなつたやうに急に生徒達に背を向けて、黒板の方へ前屈みになられたかと思ふと、急いで袂から手巾を出されて眼の淵を拭きながら嘔り上げました眞箇に忍び泣きと云ふのが爾う云ふのでせう。

生徒達の心は暗くなつて終ひました。教室内は森として終ひました。

先生は纏て手巾で顔をおなほしになつて此方へ向かれましたが、俯向き勝ち

に教授を始めやうとなさいました。

此の時、突然、

「先生——。」と聲を張り上げて手を舉げた方があるのです。見ると、級中第一の飄欣屋さんながら秀才の三浦さんなのです。

「何ですの？」先生のお聲はいつもと違つて沈んでゐます。それにも關はらず三浦さんは立上ると、

「あの——先生、けふ怎うかなさいましたの？ 私心配ですわ」と首を横に傾げて見せました。その様子が如何にも三浦さん一流の飄氣ぶりなので皆は一度に嘖と失笑して終ひました。それが爲めに先生も皆の笑ひに釣り込まれて、泣顔に笑ひを作つて、

「いゝえどうも致しませんわ」と仰しやつたかと思ふと、急に御自分で御自分

の心に鞭打つやうに、急に明るい笑顔をなすつて、「鳥渡と體の具合が悪かつたので——済みませんね、皆さんに厭な顔を見せて、ほゝゝ皆さん心配なさらないで下さいね。何でもないんですから。さ、授業しませうね」と、先生は未だ多少残る愛ひ顔に笑を湛へて、御本を開くと

「徳永さん、先を讀んで御覽なさい」

徳永さんは立上つて前の日の先きを勢ひよく讀み始めました。そして授業は始まり無事に第一時間の放課の鐘が鳴りました。先生は教室を出る時、飛び出して來た三浦さんの肩を叩いて「三浦さんの茶目さんのお蔭で先生の病氣が癒りましたわ。ほゝゝ」と感謝するやうにお笑ひになりました。

併し、今まで一度だつて、こんな事のなかつた得能先生だけに生徒たちの疑問と心配は除きません。

「どうなすつたのでせうね」

「爾うね」放課時間に寄り集まつた私たちが茶目仲間さへ心配し合ひました。

四時間が済むと、お午の放課時間は四十分あります。皆は翼を伸して騒ぐ時間です。

私たちが茶目仲間が夢中になつてフリースローイングをして居ますと、其所へ駆け付けて來たのは同級でも「貞級」の、私たちの仲間で第一探偵長と綽名を持つて居る西片さんと放送局長と云はれる田邊さんでした。勿論綽名の通り西片さんは探偵が巧いし、田邊さんはお喋舌りでも彼でも放送せずには居られない方ですが、決して悪氣のある方ではないのです。二人は私たちの所へ來ると、異口同音に

「聞いたわよ、聞いたわよ」と大事件のやうに云ふのです。

「何を？」と、皆は勢ひ聞く事になつてゐるのです。

「得能先生のこと——そりや随分なのよオ」

と、田邊放送局長は眼を丸くして見せました。

「得能先生、どうなすつたの？」

皆が心配してゐた問題だけに、

「え、得能先生が怎うかなすつたの？」と、遠くへ離れてゐた方まで集まつて

來ましたので、西片探偵長も田邊放送局長も得意になつて「そりや随分お氣

の毒だわ」と、云つて却々話すのを勿體ながるのです。

「怎うお氣の毒なのよ」と、私が急性くと「それちや云ひませうか」と探偵長

と放送局長は顔を見合せてましたが「あのね、得能先生ね、今朝あのお裁縫

の山上先生に、とても嘔鳴られたんですつて、貴女は生徒の人氣を集める爲め

に、生徒を甘やかして遊んで許りゐる。何にも出来ない生徒にまで好いお點ばかり付けて生徒の人氣を集めて何をなさる氣なんですかつて、そりや得能先生を窘めたんですつて——」

「まア酷いッ」と第一に私は憤慨しました。

「それちや、あのヒスが始まつたのね」と云つたのは三浦さんでした。

「それで得能先生は何て仰有つたのでせう」

と誰かゞ後を聞きます。

「何にも仰有らず、悪う御座いましたつて謝まつてらしたんですつて——」

「謝まることなんか無いわよ」

「爾うだわ、爾うだわ」

と、皆は得能先生の爲めに、到底も憤慨し始めました。

「同じ先生でゐて怎うして得能先生ばかり敗けてゐるんでせうね」と、誰か云へば

「そりや年が若いんですもの」と、一人が云ふのを遮つて、津田さんは物知り顔に

「だつて得能先生は、此所の學校にゐらして古は矢張り山上先生に教はつたんですもの、いまは同じ先生でも以前は先生と生徒ですもの、矢張り威張つてゐるのよ、山上先生は——」

と、説明しました。

「それで同じ先生になつたもので癢なのでせうか」

「爾うかも知れないわね」

お裁縫の山上先生と云ふのは、若い時に未亡人になつた五十幾歳になる學校

では古い先生で、到底もヒスなんです。怒ると譯も聞かずに叱り付ける。折角生徒が縫ひ上げて行つたものでも、肝癢が起ると見てゐる前でスースー糸を抜いて終つて

「縫ひ直してらつしやいッ」と、そりや怖い顔をなさるんです。そして好い着物ですと好い點を下さるけど、木綿や紡績などを縫つて行つても決して甲は下さらないので。生徒にも一番依怙最良があるつて、誰だつて好きな生徒はな

いんですけど、學校で一番古いので威張つてゐるんです。「貴女怎うして、そんな事を探偵して來たの？」と、私が西片探偵長に聞きま

すと、「あら、私、探偵なんかしないわ、お湯呑場へ行つたら小使さんの小母さんが話してゐたんだわ、今朝教員室へお茶を持って行つたら山上先生がヒスを起し

て斯うだつて云つてたんだわ、ねえ田邊さん」

「え、ですから眞箇だわ」と、田邊さんも云つたので愈々生徒たちの同情は得能先生に集まると同時に、山上先生を憎むこと、毎時の不平も一緒になつて誰かゞ

「私たちが皆お裁縫を出さない事になると好いわね」と云つたのが機會けとなつて

「爾うしませうよ、誰もお裁縫の時間には出ても、決して縫上りを出さないことに——」

「それが好いわ」

「私も皆さんがすれば爾うするわ」と云つたのは映畫狂ひでお裁縫の大嫌ひな富岡さんでした。

「私だけ出さないで私だけ睨まれたつて詰らないんですもの——爾うしませうよ」

「え、爾うしませう出さない方は指切り」

と、三浦さんが叫んだので、忽ち其所にゐた廿人許りは指切りをして

「他の方々にも皆爾うさせませうよ」

「それが好いわ」

「断然、それが好いわ」

と、騒いでゐますと、

「あら、得能先生がゐらつしやるわ」と一人が指差す方を見ると、毎時なら運動場へ出て来る先生が、今日は御手洗場へ行かれたのでせう、向ふの廊下を教員室の方へ行かれる所なのです。

「行きませう」と茶目の三浦さんが先頭に立つて駆け出しましたので皆は何の理窟なしに得能先生を目掛けて駆け附けると、忽ち先生を取り巻いて先生の袖を捉まへたり、袴の紐を握つたりして先生々々と慰めるやうに燥ぎ立てました。得能先生はたゞニコ／＼としてゐますが、皆が、何を感激して、こんなに騒ぐのか解らないのです。

「何をなさるんですね、ほ、ほ、ほ、」

聽ては皆は騒ぎの擧句に、得能先生萬歳を唱へて手を挙げました。

此の時、教員室の前に山上先生が現はれて、此の様子をヒステリックな眸で凝と見てゐましたので得能先生は逃げるやうに教員室へ入られました。

「私の方も一切不裁縫同盟よ」

「私の方はまだ二三人知らない方があるらしいけど、皆が爾うすれば爾うなる

わ」

「私の組では、誰方が書いたのか廻章が来たので皆賛成して名を書いたわ」

「ほ、ほ、勇敢ね」

「お可笑いよ、最初に名を書いた人が知れないやうに、五六人の名前が圓く輪のやうに書いてあるので誰が最初に書いたか解らないの……」

「まア、好い方法ね、私の方でも爾うませう」

同じ三年でも異つた組の生徒たちは斯うして連絡を取つたので忽ち三年全部は山上先生へお裁縫を出さない同盟が出来上つて終つたのです。

そして最初のお裁縫の時間は私たちの組でした。

五十疊ばかり敷いてある舞敷の裁縫室には毎時のやうに、裁ち板を前にして列んで坐りました。毎時なら坐る前に山と積まれるのですが、此の日許りは一

枚もありません、皆、知らん顔して自分の席へ坐つて終ひました。

先生は偶と机の上を見ましたが一枚の縫ひ物すらないので

「皆さん、宿題のお裁縫は？」と、何かの間違ひのやうに軽く聞きました。クス／＼と云ふ忍び笑ひが何所かで聞えましたかと思ふと、クス／＼／＼、ホ、ハ、ハ、と笑ひは段々に大きくなりました。

「皆さん、此の前の宿題のお裁縫は怎うなすつたんです」と、山上先生は稍急き込みながら聞き返しました。

フ、フ、と笑ひ聲は波を打ちましたが誰も下を向いて返事をする者はありません。

「怎うなすつたんですよッ」と、先生の聲は舟高になつて來ました。

もう生徒は笑ひません。可笑しいのと怖いのを一緒にした氣持ちをお肚

に抑へて黙つて居ます。

「おや、變ですわね、」と、先生は小首を捻つて考へたやうでしたが、今度は急に聲を張り上げて、

「怎うしたんです？ 宮部さん」

斯う云ふ時にお氣の毒なのは組長です。先生として見れば組長に聞くのが當然でせう。

「宮部さん、怎うしたんですの」と先生の催促に

「はい、あのう……」と迄は云ひましたが組長の宮部さんには返事が出來ないのです。

すると例の茶目の三浦さんが横から

「他の御勉強が忙がしくつてお裁縫をしてゐる暇がなかつたんですの」と云ひ

ました。

「え、何ですつて、他の御勉強が忙がしいつて、何の御勉強です？」

そろ／＼山上先生はヒスになり出しました。

「英語も地理も歴史も博物も……もう直き臨時試験がありさうなんですの」と三浦さんが云ひました。

「それで皆さんは云ひ合せてお裁縫をなさらないのですかッ」と先生が呶鳴つたので又クス／＼と云ふ忍び笑ひが起りました。

その笑ひ聲を聞くと先生は愈よ怒りました。

「皆さん、手をお休めなさい」と皆の裁縫を止めさせて

「宮部さん貴女も爾うですか」

「えゝ……」と宮部さんは蚊の鳴くやうな聲で返事をしました。

「宜う御座います。それなら其れで私は校長に云はねばなりません。皆さん好くお聞きなさい。これには誰か貴女方に他の勉強をすれば裁縫はしないでも好いなんて云つて聞かせた方があるのでせう。いゝえ私には解つてゐます。さ、それを仰有い。何の先生がそんな事を仰有つたか？」と、先生は威猛高に云ひました。

「まア——」皆は顔を見合せて終ひました。

誰も返事をする者はありません。

「貴女方には云へないでせう。貴女方のお友達のやうな先生が云つたに極まつてゐます。宜ござんす。私は校長に話して處分しますから——」。

と、云ひ放つて、先生は教授用の尺度やチョーク函を取り上げると、

「けふのお裁縫はお休みにします」と云つたまゝ「お禮」もせず磐若が鹽を

嘗めたやうな怖い顔をして教員室へ歸つて行つて終ひました。

「けふのお裁縫到底も痛快だつたわよ」

「私の組でも——一つもお裁縫が出てないもので怒り出して、此の組もですかつてね。そして斯うなのよ、お裁縫の出来ない者は女の屑だつて。お裁縫さへ出来れば女はそれで好んだつて随分古いわ——そしてね得能先生が私たちに意地を付けたのだらうつて、獨りで極めてんの——」

「爾うよ、私の組の時もお友達のやうな先生に云はれたのだらうつて」

「随分邪推深いのね」

「でも、得能先生にお氣の毒ね」

「皆が校長先生に云へば解るわ」

学校の歸りは勿論何方へ歸る方も此の話で持ち切りです。

「四年も爾うするんですつて——」

「爾う痛快ね」

山上先生は三年と四年とを受け持つ裁縫の主任先生なのです。三年の不裁縫同盟の爲めに四年も半分以上は出さない事に決まつたのださうです。それを聞いて益々三年生の結束は固くなつたのです。

翌日學校へ行きますと、第一時間目、三年生は全部大講堂へ集れと云ふので

で、三年の「貞組」も「淑組」も「節組」も一齊に大講堂へ入つたのです。

「きつとお裁縫のことよ」

「爾うかも知れないわね」

低聲で話し合つて居ますと、正面の扉が開いて、校長先生を先頭に各組の主

任の先生に續いて案の定、お裁縫の山上先生と、國文の得能先生が入つて來ました。

山上先生は庄塚のお婆さんのやうに怖い顔をし、得能先生は宛に泣く雪姫のやうに悄れてゐるやうに見えるのです。

それを見たゞけで皆は口には云ひませんが昂奮し始めました。

校長先生は先づ壇上に立つて禮を濟ますと、

「皆は何故か云ひ合せて裁縫の宿題を出さなかつたさうであります、これには何か誤解があつたやうに思はれる。他の學科が忙がしい爲めに出來なかつたと云ふ事なので、各主任によつて調べて見ると、毎時と變りはなく急に忙がしくなつたといふ理由はないそれで教員會議を開いて研究して見ると皆さんが何か山上先生に對して誤解をして居るやうに思はれる節があるから、此の際誤解

を一掃して今まで通り熱心に裁縫をせねば不可ません。今更日本女子の裁縫の必要を説く迄もない事であるから云ひませぬが、山上先生は決して皆さんを故意に苦しめる爲めに厳しくなさるのではありません。皆みなさんの爲めを思へばこそでありますから決して誤解のないやうに……」と、仰有いました。

次ぎに山上先生が演壇に立つて、決して皆さんに悪かれと思つて厳しく云つたのではないと繰り返して仰有いましたが、皆は毎度の事なので又始まつたと云ふやうに顔を見合せて突つて居ました。併し得能先生がお立ちになると、皆は何を仰有るか乗り出して聞きました。

「私が世間馴れず、不束な爲めに山上先生に御迷惑になつた事があつたさうですが、決して皆様は申し合せて事をなさるやうな事はなさらないで下さい。山上先生は私も此の學校の生徒の時に皆様と同じやうに教へて頂いた恩師であり

ますから皆さんも私と同様に恩師として尊敬して頂かないと、私の不徳が愈々増すことになりますから、皆さんも出来るだけお裁縫に精をお出しになつて頂き度う存じます』

と、得能先生の仰有ることは亂れ勝ちながら、山上先生を立てゝ居ました。それで大講堂の集りは終つて仕舞つたのです。

「お、詰らない、何の事なの？」と一人が云へば、

「厭なことだわ、お裁縫なんか出すの——」

と、互に云ひ合つて居ます。

所が此の事が四年生に知れ、お裁縫なんか出さないでも誰一人叱られた者なく、調べられた者もないと云ふ事が解つたので、其の日の四年生も一齊に不裁縫同盟で、持つて来て居た方までも宿題のお裁縫を先生の手許へも出さなかつ

たのです。

併も、其の日學校の郵便受函へ、三年の各組の名で誰が書いたとも知れぬ手紙が三通入いつて居たのです。それは誰と誰とした事か私は薄々知つてますが、此所へは書きませんその校長先生宛の手紙には、

山上先生はヒスですから厭であります。

三年貞組一同

山上先生は舊式ですから厭なのです。

三年淑組一同

山上先生はえこひいきですから厭です。

三年節組一同

これが一々別な封筒に別な紙に書いてあつたのです。

私は全くこれだけは好くない悪戯だと思ひました。第一卑怯だとも思ひましたが、もう私が聞いた時は郵便受函へ入れて終つた後だったので怎うすることも出きませんでした。

併し、これと云ふのも全く得能先生への同情が山上先生への反感になつて現はれた結果だと思ふと私でさへ痛快に思ひました。斯くして事態は愈よ穏かでなくなりました。

X X X

その翌日から山上先生は學校を休んで終ひました。そして三年の貞組のお裁縫の時間になると、得能先生がお裁縫室に現はれて、

「けふは山上先生がお休みで、私の手が明いて居ますから代理なんですの」と仰有いました。皆は手を拍いて喜びました。そして

「その方が餘程好いわ、先生そのままお裁縫の先生になつて下されば一生懸命になりますわ」と云つた生徒がありました。

「まあそんな事を仰有るのぢやありませんよ」と、得能先生は仰有つたのです。この事が、學校中に廣まつたので大變な騒ぎです。

併も、三日許り經つと、學校の掲示板へ、

山上ろく子

右願ニ依リ本校教諭ヲ免ス

××高等女學校

と、揭示が出たのです。

到頭生徒の願ひが叶つて、校長先生は山上先生を追拂つたのだと云ふ評判が大變です。

「校長先生は矢張り偉いわね」

「得能先生も助かるわね得能先生は女大の家政なんですものお裁縫が好いわ」

と、生徒は痛快を叫んで掲示板の前で萬歳を唱へるやうな騒ぎです。

所が、それから又二三日経つと、得能先生もお休みになりました。

「怎うなすつたのでせう」

と皆が心配してゐる間もなく、得能先生が休み出してから、三日目の朝です

嵐のやうな騒ぎが生徒控所に起つてゐるのです。

何事だらうと私も控所へ駆け込んで見ますと、控所の羽目板へべつたり貼ら

れて居るのは女大の鷗鳴會の會報です。それには可成り大きい寫眞入りで

得能俊子さんのお芽出度

本校家政科第十八回首席卒業得能俊子さんは△△高女に教鞭を取つて居たが此の程齋藤同高女校長の媒介で、同校山上ろく子女史の令息法學士山上文衛氏と婚約成り昨十一日學士會館にて長島式で華燭の典を擧げ即夜熱海へ新婚の旅に出られた、新郎は帝大法科出身在學中既に高文をパスした秀才である。新婦は勤務中の學校の都合で學年代りまで奉職する筈で近く東京會館に披露の宴を催すと

としてモーニング姿の新郎と新婦の得能先生の角隠しをした花嫁姿の寫眞が載つて居るのです。

「えゝゝゝ」

誰も開いた口が塞らないのです。

「驚くわね」

と西片探偵長が云ひしました。

「これで解つたわ、山上先生が得能先生をお叱りになつた譯がね嫁と姑なんですもの——」と心得顔に田邊放送部長が云ひました。

それから恥かしいと云つて躊躇する得能先生を連れて山上先生が學校へおられたのは二日目でした。

そして恥かしがる得能先生を故意と運動場へ連れ出して私達に引き合せたのも山上先生でした。

私たちは何と云つて先生に御挨拶して好いのか解りませんから、たゞ御辭儀

をしました。

すると山上先生はニコ／＼笑つて

「お芽出度ぐらの仰有いよ、私は皆さんの憎まれ者でしたが、こんな好いお嫁さんが居ますから幸者よ、皆さん此の得能先生、いゝえ今日からの若い山上先生はね、私の可愛い嫁なんですから、これまで以上大事にして下さいね……ほゝゝゝ」

と、山上先生は晴やかに笑ひました。

キユーピー會

門衛の後の羽目板に貴女の幸福を教へる神様のお手紙があります、直ぐに行つて御覽遊ばせ。但し、これを他人に話すと不幸になります
幸福の神の使姫より

斯う書いた結び文があたしの靴の中に入つて居ました。あたしの學校では、戸外の靴と校舎内の靴とは別にしなければ不可なのです、ですから、學校が退ける皆靴置場へ来て上靴を脱いで、戸外の靴と穿きかへて歸るのです。

いま、あたしが自分の靴を穿きかへようとする、足に觸つたのが此の結び文なのです。

「まア誰方がこんな悪戯をしたんでせう」

あたしは爾う思ひましたけど、幸福を教へると云ふのですから悪い氣持ちはしません。

毎日のやうに仲好しの徳永さんが、御門の所で待つて、下さるだらうとは思ひましたが、他人に云ふと不幸になると云ふので、あたしは只獨りで、毎日一緒に歸る方々が待つて、よと云ふのも構はず、御門の横の門衛所の裏へ廻つて

見たのです。すると其所の羽目板に成る程、薄桃色のレターペーパーの結び文がありました。私は其の門衛所の裏へ隠れたまゝ、密と其の文を開いて見ました。

貴女が幸福を得るまでには、まだ時間がかかります。貴女は明日の日曜の午後二時上野動物園のお猿さんの前の柵の右角に、石で抑へた赤い紙の下を御覽にならねばなりません。但し雨が降つたら明後日また此所へ。この事を他人に云ふと不幸になります。

幸福の神の使姫より

と書いてありました。

その時、あたしは偶と昔を思ひ出しました。小學校の時はお母様に件れられて上野の動物園へ行くのが何より楽しみだったのに、女學校へ入つてから一度も行つた事はありません。あたしは急に上野の動物園が慕しくなりました。

「ほんとに、彼の頃は無邪氣だったんだ」と自分ながら思ひました。

で、あたしは家へ歸ると直ぐお母様に爾う云つたのです。

「お母様、明日久し振りで上野の動物園へ連れて行つて下さらない？」
するとお母様は眼を丸くして。

「まア、何を考へたの？ 五つ六つの赤ちやんちやあるまいし、ほゝゝ」

「でも、私、大きくなつたから、見たいのよ。小學校の時と何の位、面白さが違ふものかと思つて？」

「お馬鹿さんね、でもお母さんも暫く行つた事がないから行つて見ませうかと、云ふ譯で無理に連れて行つて頂くことになりました。

その晩、お父様は私たちが上野動物園へ行くと聞いて、

「俺も實は動物園へは二十年も行つた事はない。河馬なぞ云ふものは、話や繪では知つとるが、見た事はないから俺も一つ行つて見よう」と云ひました。

全くの話が東京の人は行かうと思へば何時でも行けると思ふ所爲か、立派な政治家や實業家で河馬を見た事のない人が多いうです。

翌日お午御飯が済むと、お兄さんは動物園なんかと云つて、野球をしに行つて終ひましたが、私はお父様とお母様に連れられて行きました。

お母様は、お父様と一緒に遊びに出る事なんか何年振りでせうと云つて笑つてゐます。

私たちの乗つた自動車は動物園へ着いたのはまだ一小时前でしたが、道が日曜なので大變な人出ですが、皆云ひ合せたやうに子供連れです。

私も急に小學生に返つたやうな氣になりましたがお母様も、昔を思ひ出すと

若返るやうな気がしますわとお父様と笑ひ話をしてゐました。

午後二時お猿さんの前——と云ふ手紙を氣にしながら、私は故意と象や臘獸や白熊の水泳ぎの所で時間を潰しました。河馬の所へ來ると。お父様は珍らしさうに覗き込んで、

「成程、河馬とは能く云つたものだ——会社の營業部をやつとる永江と云ふ男と能く似とる」と云ひました。

お猿さんの所へ來た時、私の腕時計は恰度二時五分前、大きな網の檻にお猿さんは跳ね廻つて居ますが、私は人に見せると不幸になると云ふので、お父様やお母様に知れないやうに、好奇心を唆られながら柵の左角へ寄つて行きまし
た。

見ると、そこに一寸四方位の赤い千代紙が小石で抑へてありました。私はそれを密と取り上げて見ますと、

「この下の砂を掘つて御覽遊ばせ」と書いてあります。なる程、その千代紙の下は小高く砂が盛り上つて居ます。

私は、直ぐにその砂を掻きのけると、淺く掘つた中から小さい手紙が出ました。その手紙の中に何か入つてゐるらしく真中が膨れてゐます。私は素早く其の手紙をポケットに藏ひ込みました。

それから私達は、動物園を出ると、精養軒でお茶を喫んで歸りは銀座へ廻つて、お母様はいろ／＼買物をして家へ歸つて來ましたが、私は、その間もポケットの手紙が氣になつてなりませんでした。

「何が入つてゐるのだらう？」と云ふ好奇心は躍るやうに私を焦らせるのです

私は家へ歸るなり、自分のお部屋へ入り込んで早速手紙を開けて見ました。中から現はれたのはセルロイドの小さい五分ばかりのキュービーさんに手紙が添へてありました。

此のキュービーさんは幸福の神様ですから小さい函に入れて月曜の朝、學校の門衛の裏へお置き遊ばせ、そして學校の歸りにその函を取りにお出でなさい。貴女の幸福が待つて居ます。これも他人に話すと不幸になります。

幸福の神の使姫

としてありました。

私は誰がこんな事をするのか見當が付きません、手紙の文字も上手だし、その手に覺へもありませんが、幸福の神なのだとすると、悪い筈はないと思つた

ので、私は石鹼の入つてゐた小函へ、そのキュービーさんを入れて翌朝學校へ持つて行きました。そして滅多に人の來ない門衛所の裏へ密と置いて行きました。幸福が待つて居ると云はれてゐるので、其の日の學校の長いこと、漸く學校が退けたので、私は、けふも徳永さんと離れて、徳永さんが私と一緒に歸らうとして探してゐるのも關はず、獨り隠れて門衛所の裏へ來て見ました。石鹼函は朝置いた通りになつてゐましたが、取り上げて見ると、ガラ／＼音のする筈のキュービーさんは無くなつて、中から手紙が出て來ました。

此の次の日曜日の午前十時に幸福の神のキュービーさんは、貴女を井之頭公園の辨天様の石の御門の右の柱の下で待つてゐます。キュービーさんはお辨當にサンドキツチが欲しいと云つてゐます。雨が降つたらキュービーさんは月曜の朝此所へ戻つてゐます、これも貴女は他人に話すと不幸になります。

幸福の神の使姫

としてありました。

私は次の日曜までが待ち遠でなりません。何か私には幸福が待つてゐるやうな気がしながらも悪戯ではないかと思ふ心配もあります。然し他人には云へないので相談する譯にも行かないのです。

その翌日からは以前通り、誰より仲好しの徳永さんと一緒に學校から歸るのです。然し毎日なら

『今度の日曜、何所かへ行かないこと』と約束するのですけど、今度ばかりは私は獨りで井之頭公園へ行かなければならないので、徳永さんに云ひ出されるのを要心して居ました。

到々一週間経つて土曜になりましたが、徳永さんに明日の日曜の事は云ひ出

されなかつたので、私はほつと安心しながら別れました。

日曜は初夏の光を一ぱいにひろげた美しい朝でした。

前の晩、私が井の頭公園へ、遊びに行くと云ふと、お母さんは

『誰方と一緒になの？』と聞きました。私はハツとしました。獨りでと云つたつて決して許してはくれないに極まつてゐます。

然し私は獨りでないに極まつて居ます。幸福の神のキュービーさんと二人と云つた所でお母さんには解らないでせうが、キュービーさんが獨りで行く筈はありません。幸福の手紙は學校が始まりなのですから、乾度、學校の方で私を知つてゐる方が、其のキュービーさんを持つて行つて置くに相違ありません。ですから私は

『學校のお友達と一緒に』と云つたのです。

それでお許しが出たので、私は前の晩から用意をして、お辨當に幸福の神のキュービーさんが大好きだと云ふサウンドキツチを拵へて持つて行つたのです。吉祥寺で省線電車を降りて左へ、公園へ入つて下り坂を急ぎ足で降りると、左側の停車場へ出る近道の横町から出て来た徳永さんにはつたり出會つたのです。

「あら！」

「あら！」二人は顔を見合せて終つたのです。

「まア酷い」

「貴女なの？ あんな事したの？」

「厭だ！ 何方が？」

「お可笑いわね？」

と、徳永さんは首を傾けました。そこで私は、徳永さんがした事ではない事が解つたので

「あんな事つて何なの？」と私が聞きますと、徳永さんは

「厭だわ、貴女知つてる癖に」

「知らないことよ」

「そんなら貴女何だつて、こんな所へ獨りでゐらしたの？」

「云はないわ」

「そんなら私だつて云はないわ」

「貴女強情ね」

「お互つこにね」

「ほゝゝゝ」